昨年の史學地理學界

◉史學界

史學一般　歷史學或は歷史的認識に關する論著及び紹介は西南獨逸派の歷史哲學の影響により前年と同じく盛であつて、此方面を支配してゐる觀がある。まづ「歷史學概論」（丹羽正義）が歷史學に就いて從來哲學の方面から試みたものを歷史家の手によつて成された著述として擧ぐべきである。著者は其第一部に於ては科學としての歷史の概念を確立せんとし歷史の知識の批評を試みてゐる。而して歷史は學として方法論的には文化科學に屬し、歷史的認識は個性的認識であるとし、第二部に於ては研究法の論をなし經驗的實在の確定、歷史事實の確定方法、史料の種類、批判、補助學、文化史、時代區分等を、論じ尙は把捉に就いては歷史概念は文化價値一般に係らしめてまとまつた全體を把捉すべきであるとしてゐる。尙ほ歷史の認識論に關しては「文化的認識と歷史的認識」（恒藤恭經濟論叢）は文化的認識又は文化科學的認識は其普通化的概念の構成を目ざすか個性化的概念構成に目ざすかに隨つて區別し後者を歷史的認識と名づけ、これを區別する事の可能であるし、文化的認識と歷史的認識とは相互に對立する概念ではなく、歷史的認識は文化的認識の種概念であるとの論を進め、尙ほ又「歷史の論理」（渡邊吉治、講座）は、同じくリッカートの學說を釋き、歷史學の知識を批判したもの、まづ歷史の論理學としての歷史哲學と在來の形而上學としての歷史哲學との區別より說き起し歷史の論理及び歷史科學の認識論的見解につき諸家の學說を說きヴィデルバンドリッカートの思想を解說し、尙ほこれ等に對する諸學者の反駁例へはバルト、カッシラー等の說を紹介したものである。又「ナトルプの歷史哲學」（兒玉達章、同誌）はナトルプの一九一八年著はすところの「精神の諸時代」Die Weltalter des Geistes 卽ち

「歴史哲學的筋書」と稱するものによつて彼の歴史哲學的思想を知らんとしたものである。而して要言して彼の歴史哲學は歴史學の理論であることに於て西南獨逸派の歴史哲學と同一の問題を問題とし、歴史學を自然科學と別種の學問として居る點も同一であるが、法則科學と見做し、普遍的精神の法則と名づくべきものがあることを主張すること彼の獨特の見解があるを指示してゐる。而して「第三史觀」(高田保馬、思想)は從來の歴史觀卽ち第一觀念論的なる精神的史觀、第二唯物的史觀に對して第三の史觀として社會學的史觀を提唱し、社會學史觀と經濟史觀と比較し、遂に社會的關係を以て最も基礎的な歴史事件決定の根據と觀んとするものである。尙ほ歴史の科學としての論議には「歴史と科學とは別箇の知識なるか」(桑木嚴翼、丁酉倫理會倫理講演集)あり。これはマインド誌上に發表せられたるものの紹介を主としたのである卽ちコリングウッドが歴史と科學とを認識論的又は論理的に別種の知識に屬するものとすることの妄なるを言ひこれは古代より自然科學が概括の方面に重きを置き、史學はこれに注意せざりしため畸形的になつたためであるとするに對してティラーは學と史とは異つてゐる。歴史によつて吾人は個々の人事件を知らうとするのであるとし、又シッラーが其兩者の論をうけて科學も歴史も其眞理は共にプラグマチックであり、究竟の分析は眞理は一であるとするの說を述べ紹介者が之れを批評して三者共に現代獨逸哲學者同の問題となつてゐる方法論上の爭議に觸れないことを遺憾とすると附加した。

史學史に關するものには「歐米史學研究五十年」(間崎万里、史學)がある。主としてグーチの研究により、最近五十年間の歴史學を略叙したもので、「歴史の意義に關してギリシア思想とヘブライ思想」(波多野精一、哲學研究)は希臘に於ては優秀なる文化の發達あつたにかゝはらず、歴史の意義を承認するに至らず、歴史の意義の肯定はヘブライ思想の功績であるを說き希臘哲學及び預言者の思想を檢討したのがある。

經濟學との接觸點に於ける史學の問題には「歴史派經濟學發達の徑路」(山口正太郎、經濟論叢)がある、これ

は十九世紀後半から二十世紀初にかけて獨逸經濟學界を風靡した實際學的經濟學の問題であるがまたロッシャークニース乃至歴史派首領シュモラーの思想及び方法論を論ずることによつて思想界に大影響を與へた歴史主義の由來を考ふる點に於て注意すべき論文である「日本社會史に就いて」(本庄榮治郎、歴史と地理)は又社會史の研究と稱せらるゝもの雜多の中より經濟問題を中心とするものに社會史を限定せんとした提案である。〔西田〕

國史　國史に關する論著の中先づ一般史に關するものとしては早稻田大學出版部の「國民の日本史」が完成して「大和時代」「飛鳥寧樂時代」(西村眞次)「平安時代」(高須梅溪)「鎌倉時代前篇」(中嶋孤島)「鎌倉時代後篇」(高須梅溪)「吉野時代」「室町時代」(薄田斬雲)「安土桃山時代」「江戸時代創始期」(西村眞次)「江戸時代興隆期」「江戸時代爛熟期」「江戸時代頽廢期」(高須梅溪)の十二冊が揃うた事を以て、國史智識普及上大なる功績があると言ふべきであらう。「日本歴史地理之研究」(吉田東伍)は博士の遺稿中歴史地理に關する研究四十七篇を採錄排印せるもので

「江戸の歴史地理」「利根の變遷と修治」「後北條氏の知行制度」「尾州の産業發達」「江戸時代の鑛山業に就いて」の諸篇は今尚ほ吾人を啓發せしむる事大なるものがある。これに次いでは、「武家時代の研究」(大森金五郎)で、その第一卷として「平將門亂の研究」「房總の平氏及び相馬御厨に關する古文書について」「平忠常亂の研究」「前九年及び後三年役の評論」「源平兩氏勢力の消長」「保元の亂について」「源平兩氏の分布と其相互間に於ける嚮背」「福原遷都の研究」の八篇を收め、所謂源平時代を見るには極めて便利である。更に降りて「建武中興の政治史的社會史的觀察」(三浦周行、中央史壇)を下したものは、先づ後醍醐天皇が天皇親政の政體を實現さるゝについては菅に幕府の消滅を期せられたのみならず攝政關白征夷大將軍の加きものまでも廢止されたのである事を言ひ、轉じて中央政府に於ては記錄所と決斷所、窪所と武者所といふ二重の機關が設けられたと同樣、地方行政も國司と守護の二重機關があつた事を指示し、其の原因を新舊兩派の衝突に歸し、更に社會的には公武の差違、若しくは攝

鑑、清華の家格が無視された事に意義を認めたのは、建武新政と地方亂離」(牧野信之助、歴史と地理)が元弘建武新政府の失政が僧徒の亡狀、地方官の暴舉、莊官の非法等によりて更に擴大せられ、一般地方民が抱いた非法張行至らざるなき關東幕府の秕政が當然廓清さるべきであらうこの豫想は全く裏切られて却て前代を憶はしむるに至り、新政は地方人志から見放された事を述べたこの併せて何れも中興の一面を述べたものであり、「後宇多法皇と大覺寺」(黑板勝美、同誌)は後宇多法皇は信仰の上から國民の思想を統一し、皇室中心にするために佛教を餘程重くお考になつたのであつて政權を北條氏の手から收めんための準備であつたと言ひ「日本文化の獨立」(內藤虎次郎、同誌)が後醍醐花園兩帝が宗教にありては禪宗を學問にありては宋學を研究されたのを始めとして中原師緒が元亨元年の辛酉革命に反對說を出した事や、神皇正統記に現はるゝ親房の政治に對する革新意見の如き此時代にあらゆる方面に革新の機運が漲り、大日本は神國なりの思想が湧き、終に征西將軍宮の明太祖への返事となつたのであつて、後宇多天皇の復古思想から日本中心思想となり次で日本文化の獨立となるのであると見たのは面白い解釋であらう。「足利時代史」(田中義成)は大內義弘の亂より始めて長尾爲景・北條早雲の勃興に及ぶ間の將軍や管領の動靜、政界の推移、幕府元老の凋落を述べ間々文藝宗教の問題を取扱つて居るものであるが、殊に足利義滿の皇室に對する不遜なる態度を難詰し、應永の年號は天皇のためのものにあらずして將軍の年號であり、義滿最終の目的は義嗣を天子として自らは太上天皇たらんとするにあつて、今一年彼が存生するならば金甌無缺の國體を傷けるに至つたであらうと言はれた點は何人も耳も傾け襟を正さねばなるまい、此の前後の時代を論じたものでは「應仁の亂に就て」(內藤虎次郎 室町時代の研究は下剋上の時代とは社會の最下級であつた足輕が將軍を剋した意味であつて、足輕の認められた事は一面から見れば天才の居なかつた時代である、此時代は日本道德の經典とも言ふべきものが生じ、政治上何等統一なき時代に、文學に於てはた思想に於て天下を統一した

復古思想のある事を論じ「室町時代の文化的概觀」（黑板勝美、同書）は此時代を以て公武共に墮落した時代であるとし「鎌倉より室町へ」（三浦周行、同書）は鎌倉幕府が御家人の所領保護干涉に全力を盡したに對して室町幕府は所領に關しては放任開放であつた事を指摘し兩政府政策の根本に於ける相違點を力說し、更にそれを外國文明の影響によりて說明したものであつて、是等の諸編を併看し近世日本社會の母胎である室町時代を充分に闡明する事が出來やう。又「慶長元和の京都」（原勝郎、歷史と地理）は政權の江戸に移つてからは大阪方の光は年と共に減退するのみであつたから京都の公卿は巧みに大阪より江戸への方向變換を試み每月十八日の豐國社への參詣を缺かさずして而かも所司代屋敷に出入し駿府江戸とも音信を通じたのであるが、此餘裕ある公卿の態度はやがて京都市民の態度であつて、其日を樂めばよいといふ氣分で享樂したと言つて慶長は足利時代の終りで元和は次の時代の冒頭であると言つて居る。九月一日の未曾有の大震災は我が國史界にも大なる衝動を與へ、これに關する各種の論考が或は圖書に或は雜誌に現はれたものが多い。中央史壇が「天變地妖震火災號」を出したのと、社會史研究が「日本震災史」號を出して我國古來よりの震災を各時代に分ちて說述したのは「安政の震災と救濟策」（本庄榮治郎、經濟論叢）を詳述したものと共にこの刺戟より生じたる產物であつたけれども、ためにわが國史に關する史料の失はれたるものが甚大である事は今更喋々を要せざる事ながら、昨年の史界を顧みるものが何よりも第一に痛嘆しなければならない。

人物傳として現はれたものは至つて少いやうであつて「歌人大伴旅人の生涯」（澤瀉久孝、歷史と地理）を述べ、彼は歌人と言はるゝよりも寧ろ詩人と言はるべき人であつて老莊思想や佛敎思想を相當に受け容れたけれども儒敎に對しては餘り興味を感ずる事は出來ない性格で、どこか樂天的な所があつた、年六十六才の時任地を去るに臨み一遊女と熱烈な情懷を歌ふ事の出來た人であつたと言つて彼の作を通じて其の人格に觸れんとしたものであるが「入宋僧寂照に就ての研究」（西岡虎之助、史學雜誌）

は彼の入宋の年を長保四年とする從來の說を排け長保五年に出發し同年に彼の土に着したものであるとし、入宋後の彼が華言に通じなかつたために專ら筆談によりて求法した苦心の程を物語り其筆蹟の頗る見事であつた事を證し「靑木昆陽傳補訂」(新村出、史林)は昆陽と東涯との關係に就ては師弟の關係は不明であるけれども文通のあつた事は事實であるとし、昆陽の蘭學にしても朝鮮文獻の攻究にしても案外に大きい感化を東涯から受けた事を指摘し、昆陽が延享元年長崎に遊學した事は少くとも延享元年でないのみならず長崎に行つた事も大に疑ふと言つたもの「有栖川宮」(武田勝藏、史學)が其の各御世代を始め各親王妃、御息所及び其の王子女に就いて略述し、當宮の官位待遇及び文學に一瞥を與へ、殿邸知行に就て記して居るか、有栖川宮の宮號は伏見宮の祖榮仁親王が應永年中嵯峨の有栖川に在らせられしその舊稱を當宮の所領地が太秦村にありし關係より採られたのであるとして故井上博士の說を修正して居る如き僅かな一例である。

對外關係を論究したものには日鮮關係史(三浦周行、朝日講演集)がある、傳說の上から見れば古代に於ける日鮮關係が濃厚であつた事は認められるが彼我吻合するものはないといふことから遺物、言語、信仰、政治社會組織の類似を見て以て日鮮同祖說に一瞥を與へ、轉じて歸化鮮人の事に移り、彼等がもと朝鮮風の姓氏を稱したが漸くにして日本風の姓氏を賜はらん事を請願し孝謙天皇の朝以來佛敎の社會的施設の一端として彼等のゑふがまゝの姓氏を許され、彼から我に接近したが又日本側に於ては日鮮關係の密接なる事蹟の殘る事を嫌つて史料を堙滅させた事もあり、此旺盛な國民的精神は歸化鮮人の子孫を同化するに役立つたと言ひ、更に日鮮間に起つた衝突に論及して、最後に日本文化の異常な發達、日本國民の歸化人に對する同情、兵力の充實と言ふ事が時代の經過といふ事と共に日鮮間を融和せしめたと結んだ。次に「朝鮮役に關する二三の考察」(同人、藝文)は最近に菊亭家から出でた秀吉の名護屋下向記を中心として、陸路には一里毎に一里塚を築かしめ、一里を三十六町と定めた

交通關係を說き秀吉の時旣に一里飛脚の制を廣き範圍に實施した事を指摘し、外征の策源地とする意圖のために築城された名島城が名護屋城に見かへられた原因は軍の祕密を保たんがためであつたことや豫期以上の大捷の報が彼の外征計畫に新しい變化を及ぼすと忽ち船舶の不足と海上風波のために渡海延期に至らしめたのは彼が朝鮮征伐を以て單なる國內戰の延長と考へ、特殊の準備に於て大に缺くる所があつたゝめであると言つたのは日鮮關係史の一部をなすの研究である、更に大陸方面に視線を向けるとき吾人はまづ「常世の國に就いて」（黑板勝美、歷史地理）は我古代文化を研究するに當り朝鮮の一部に作りあげられた支那文化を研究する事が、我國と支那との直接關係を考察する前に注目さるべきであらうと言ひ古代史に現はるゝ常世の國の思想は樂浪帶方地方を指したものではあるまいかと言へるに目が着くのであるが、「眞如親王の記念と新嘉坡」（新村出、歷史と地理）に注目するのである、これは天竺入を決行された親王の御事蹟を我國史上に永遠に記念すべき方法とか時機とかを擇ぶ

一として、親王の御出發は貞觀八年正月二十七日であり薨去の年次は不明であるけれども其報は唐僖宗中和元年に唐朝に達した、其の薨去地である羅越國は廣東より馬來海峽に入る航海路中に位する地點であるとしラオスであるとした舊說を訂正して居る。遣唐使廢止以後、日宋交通開始以前の中間に行はれた「日本と吳越との交通」（西岡虎之助、歷史地理）は承平五年蔣承勳が吳越王元瓘の使者として來朝したる事蹟、天曆元年蔣袞來朝の事情等を詳しく說明し、これら使節の來朝は貿易のためであつた外に精神的の交涉として僧侶の來往のあつた事を指摘し兩國間に於ける交通は半公半私のもので一面には過ぎし遣唐使時代の名殘を止め他面には來るべき日宋交涉を暗示するものであつたといひ、更に降りて「時計傳來の歷史」（新村出、歷史と地理）は天文十九年ザビエルが大內義隆に置時計を贈つたのが傳來の最初であり、天正十九年遣歐使節が秀吉及び外の人に若干の時計を持ち歸つた事が第二であり、慶長十一年家康が伏見に居るときに宣敎師が時計を獻じ、これは伏見の城櫓にかけられた

程の大きなものであつたと言つて其後の傳來を略述し、物好きな大名は自分の居間に二十も三十もの時計を備附けた事もあつた事を語り、西洋流の時間を日本政府が採用したのは文久二年四月七日の御觸留にあるのが最初であると言つて居る。次に「箱館役に現はれたる日佛關係の考察」(田保橋潔、史學雜誌)は舊幕府滅亡時に於ける日佛關係より說き起して佛國陸軍教官團の一部が叛亂に參加した事情を詳述し次で箱館占領に關する英佛の活動を觀察し、轉じて佛國陸軍教官の叛亂參加に關する日佛交涉を仔細に物語り、佛國公使の反駁書が新政府の無能にして遂に舊幕府艦隊の脫走を致さしめた事を指摘し、僅々數名の佛國將校がよく日本全國の軍隊を指揮し得べき理なく、ために國家の存立を危くすると公言は日本國の名譽を毀損する事少からざるべしと言つた辛辣なる反駁を更に反駁するだけの氣力は恐らく新政府になかつたのであらうと說いて居る事や、「露國最初の遣日使節ラクスマン」(播磨楢吉、同誌)の事蹟を詳細に傳へ、根室到着から越年、函館に航行等を述べ我幕府の鎖國主義を破らしめ長崎入港の許可證を得たのは若年の彼として大成功であるとせる說は共に幕末に於ける對外交涉の一齣である、猶「江戸幕府の海軍擴張と米國」(田保橋潔、歷史地理)は德川幕府が水戸齊昭の進言に從うて海軍創設の決意をなし、蘭國王ウィルレル三世の名によりて日本國大君に贈られたスンピン卽ち觀光以下咸臨、朝陽、蟠龍等の小型ながらも軍艦四隻を有するに至つたがこの蘭國の好意を無視して文久元年七月に至り海軍擴張の第一步として軍艦の建造を米國に注文したのであるがそれはハリスの好意に感激したゝめであらう。が監督官派遣の事に關しては幕府高官は自らの廉潔を以て米國を推し監督官を出さなかつたゝめにブルー井ン駐日米國公使等にたばかられる事となつたのである、その後米國よりストンウオール・ジャクソンを購入する事が出來、これが脫走艦隊を殲滅するのであるとし、更に續いて「明治元年舊幕府艦隊の江戸灣退去に就いて」(同人、同誌)は明治元年江戸城開渡の際に於て、其强硬分子は最後まで新政府に抵抗したが、それは實に舊幕府があらゆる犧牲を

拂うて苦心經營した海軍であつて彼等が此の際に執れる行動のうち品川灣脱走の事情及び軍艦引渡顚末を詳細に說明したものであつて、前者に關しては榎本武揚ら主戰派の心情に就て、後者に關しては海江田信義の盡力に就て力說し、この事件は新政府が遭難した最初の難關であつてこの由りて來る所は東征大總督府が勝安房らの能力を過信した事と新政府海軍の無力の二點に存すると言つた說を併記して置かう。

法制史經濟史社會史方面に於ては「日本經濟史概論」（佐藤學）がある主として古代及び近世日本の經濟生活を述べ農業村落及び農民階級、工業の組織勞働の編制と言つたものを詳述して居つて、社會構成の一分子である所の中流以下の階級に關する研究は可なり現はれて居る。次に、「日本古代の村落」（川上多助、中央史壇）の中に一村の人々が千人以上に出る事は、一般に文字を知らない村民に對して稻置らが命令を傳達するときには人を小高い丘に上らせて聲の限り叫ばしめ、それを二三度繰返して全村に普及せしめたものであらう事によりて推定し得ると言つたのは、やゝ興味のある說であるとして之を排ける事も出來ないものであつて、古代村落の一班を推知すべきものであり、「中世末期に於ける村落の結合を論ず」（牧野信之助、經濟論叢）と題し主として近江に頻出した諸部落の聯合團結―郡中總の現象を見て非常時に於ける部落團結の一手段と解し、平時にありては自然に要求された彼等の共同生活に於ける諸種の村規約であり、一村內の結合は神事を中心とする座制に起因することがおほいと論斷したものや。「近世初頭に於ける領民の移動について」（同人、史林）は移動の原因として城下町の繁榮、新町興行、新地の開發、鑛山開發等の積極的のものと逃散者の招致、逃亡の嚴禁等によるものであることを指摘し、その領民に對する爲政者の政策が過去の莊司のそれと比して非常に巧妙なものであつたと言ひ「江戸時代地方農村に於ける階級的社會組織」（魚澄惣五郎、歷史と地理）は丹波國保津村を拉し來つて、江戸時代を通じて苗字帶刀の特權を有し此の地方農村の上層階級であつた所謂五苗は戰國末期階級打破の時代に乘じて

擡頭したものであつて當時の成上り者であり、三百年の泰平と階級制度確立の政策とによつて保護助成されたのであるといつて居る。「江戸の名主について」(幸田成友、史學)が名主の支配には組合持、月行事持等があつた事名主の職務は御觸申渡の傳達、人別改、火の元取締であつたがその掛役として肝煎、世話掛、市中取締掛、諸色掛のあつた事、名主の世襲、賣買、役料、待遇等を巨細に亘りて說明したもので、これが時代の新古による五種の起原を擧げ、それを更に草創名主、古町名主、平名主門前名主の四等級に分ける事が出來ると言つて江戸町政制度の一班を物語つて居るのは前の諸編と共に地方制度の研究であり。「太古の本邦民族に就いて」(坪井九馬三社會史研究)說明を加へ南日本の居住民はマラヨポリネシヤ系の民族であつて就中その一派のチャム族であつた事を言語の上より說明し、更に龍蛇信仰の存在はこの民族の移住以前に前印度系民族の在住せるものなる事を思はしめるとし、チャム族について來たのはツングース系民族で、これは主として出雲方面から入り日本海方面を

平げアイヌ民族の南境に及び、それとチャム一派の北境との空閑地に入り込み遂に大和に第二の根據を据ゑて中央に雄飛したのであると言ひ、更に「太古の中國」(同人、史學雜誌)「太古に於ける紀伊大和」(同人、同誌)に於て其の說を再叙補說して居るが「蝦夷の住む日高見の國」(喜田貞吉、社會史研究)を研究し、古書に見ゆる日高見の國はヒナ(夷族)の住處の義であつて、アイヌ人の北退と共に日高見國も移轉したものであると言へるは、前掲坪井氏の論說中にヒタカミはチャム一派が北州を發見したとき彼等は取り敢へず舊日本をクラキキタ卽ち欝陶しき北、陰氣なる北國の義で名づけたものであると言つたのと對立する說である。また「莊民の生活」(中村直勝、史林)は東大寺領伊賀國黑田莊の莊民を拉し來つて、反別三斗の官物を國家に納入した此莊民は、絕えず惡黨のために其の生活を脅かされたが、その惡黨は僧兵の亞流であつて、時には莊民のためになる事もあつた、莊民は自己の所有する僅少の土地さへも入質し質流としなければならなかつたのであつて、此等の窮民を救濟せんがた

めには念佛講頼母子講の如き互助共濟機關があつたらしく、隣郷五箇莊が協力同心して他莊の違亂に當る事もあつて、自治制の萠芽が既に見えると言ひ、「つるめそ（犬神人）考」（喜田貞吉、社會史研究）はもと清水坂の坂の者で一種の非人法師であつたものが感神院に屬して下級の神人となり不淨物除去の役に服したり山法師の手先となつて猛烈なる戰鬪員となつたりして境内外の警固に任じた傍ら弓矢弦等を製造販賣の特權を得或は唱門師として人家の門戸に立ち、或は夙の者として葬儀に干與した事を說き「放免考」（同人、同誌）が檢非違使廳の下部たる放免はもと犯罪者の刑期滿ちて放免されたものである。が其の末孫はまた非人として取扱れた事を言つたのと併して社會の落伍者たる人々の沿革を述べたのであるが、これら公民に非る人々が、本所領家の力に寄りて或る種の特權を獲得し、終に社會的地位を昂上せしめて資本者階級に達せんとしたる一例としては「禁裡供御人に就いて」（中村直勝、同誌）があり更に「平安朝遊女の研究」（鈴木登、同誌）を發表し、此の時代に遊女が殷盛を極めた事

情は主として當時の旅行困難に伴ふ慰安と僧侶の孤獨生活がそれであると言つたのや「盲僧考」（岩橋小彌太、同誌）が盲僧の發生時代を以て鎌倉末頃ならんとし、その旦那を賣買する事を說きたるとは何れも社會を組織する分子についての論究であつた。更に「武士成立の經濟的要素」（三浦周行、經濟論叢）は國史上に於ける武士の成立を說明しやうとするものが或は政治上より或は軍事上より、或は社會上よりと種々の方面より考へるものであるが、その經濟上よりの考察は至大なものであるこの見地から、地方地主がその所有地を寄進したる權門勢家神社寺院の手より離れて武士に接觸せんと試み、武士また莊園の增殖支持に熱中したことを說き、斯くて平氏は殆んど全國に亙つて居つた地主であり地頭であるところの家人を以て事實上の土地管理を行ひ同時に國家の治安維持の任に當り頼朝が平氏に代ると、從來の主從關係が御家人制度に依つて一層組織的に一層徹底的に行はれる事となつたと「大名の社會的及び法的概念」（牧健二、法學論叢）は述べ元來大名といふ概念は社會的な者であつ

て法的なものではない、鎌倉時代に於てはまだ何等法的性質を有したものではなかつたのであるが、室町時代に至ると一つは將軍と諸大名との主從關係が前代よりも解放せられて全國的となつたためと二つは大名の經濟力の增進に伴つて領地に於ける權力が增加した事のために將軍に服從する事によりて大名なる自らの地位に於て法上の能力を獲得し漸く法的概念に進んだのであるとし、之と併せて「大名論」(同人、歴史と地理)に於て大名の起源を說き、鎌倉時代に大名はまだ大名として特殊な階級的勢力を成すに至らず實に守護又は地頭として活動したものであつて、大名の名稱はまだ記錄に現はれないが、鎌倉末期になると全國各地に置かれた地頭が漸く勢力を得て莊園公領の組織を蠶食し、その年貢を横領し、自己の私有化したのであつて南北朝室町時代は大名としての領地組織が出來た時代であり、守護も亦此時代に自己の分國を領地化したのであるを說き、「守護地頭に關する新說の根本的誤謬」(平泉澄、史學雜誌)は前年に於て中田博士と牧學士との間に數次の論爭が交された文治守護地頭設置の問題に就て異論を挿み、守護地頭は義經行家追討のための臨時的施設ではなく、義經行家の騷亂を機會として設置された天下警備の永久的制度であると斷言し、これに對して「文治の守護地頭に於て平泉學士の敎へに答ふ」(牧健二、同誌)は、前說のよりて來る史料の誤讀を指摘し、文治の守護地頭を永久的に設置された國家警衞の制度であるとする說の最後の根據を覆し、義經等兩人の追捕を完全に執行する方法として臨時的に軍政を行うたもので、一般的な警衞そのものを目的として永久的に置かれたものでないとする持說を支持して居るのは武士階級の社會的地位を示す一研究と見る事が出來やう。「平安朝の莊園政策」(川上多助、同誌)は長編であるが、其の中、莊園は元來租稅を負擔しなければならないもので、あるけれども、不輸稅の特權を與へられたものだけが不輸租であつたが、藤原氏以下貴族の所有地が多く不輸租田と化したのは勅旨田が其の俑となつたのであらうとした點や、醍醐天皇の延喜二年の整理政策が相當な成績を擧げたのみならず後世に大なる影響を與へたと言つた事

や後三條天皇の記錄所創置の日は東大寺文書により、延久元年閏二月十一日であつて、其れに關する官符は三月二十三日であつたとした事、記錄所が賴通の莊園まで整理したかどうかは不明であるけれども其嫡子の莊園と雖も其文書を提出せしめた事は疑ふべからずとした事、新立莊園停止の勅は不正なる莊園を淘汰する事が目的であつて正當な手續によつて立てられた莊園の特權を廢止する意志のあつたものではないと言つた點などは大に觀るべきであつて、延久の記錄所については、「延久記錄所の意義」(三浦周行、歷史と地理)が記錄所は單に券契不明の莊園を停廢せしめたものではなく天皇親政の御經綸と相俟つて積極的に國有地を多くすると共に皇室の御領を潤澤にする事を根本方針としたもので、攝籙家權力失墜の第一歩であつたと斷じたのと併せ考へて相啓發する所があらうと思ふ。次に、「南朝の經濟に關する一二の私見」(中村直勝、同誌)は後醍醐天皇が土地に對する本所領家の聯鎖を解かれた結果南朝の所有し給うた八條院領や室町院領半分は四散してしまつて南帝の手には何も殘

らなかつたから南朝は足利幕府の創めた半濟に倣うて朝用分を始めて漸く經濟上の命脈を繋がれたのであつて、朝用分は臨時のもので其收入全部を召された點が、半永久的に收入の半分を收めた半濟との相違點である事を力說して「室町時代の皇室御領」(同人、室町時代の研究)北朝側に傳はつた御領は主として長講堂領室町院領半分等であつたが、此時代に新に禁裡御料所の名を有つたものや各寮司の所有する土地よりの收入、關料、諸公事錢等が加はつたのであつたと言つて此頃に於ける皇室財政の一班を示したものである。「京都の屋地子について」(岩橋小彌太、歷史と地理)は室町時代に實力ある公卿や寺社が定期に京都の町から宅地稅を取ることになり、それがやがて京都に屋地子の起つた所以であらう。而して京都の屋地子は町人又は一町或は數町から其地を知行する寺社又は公家武家に夏冬二季に米錢を納入したものであるが、地子賦課の標準や勘定期間は一定せず、町内軒並に悉く出したものでもないとし、轉じて室町時代に於て地子といふ語は年貢、借地料、宅地稅の三つの意義を有

つて居つたとして、地子が宅地稅の意味ある事を力說して居る。「桝の研究」(鈴木登、同誌)は奈良朝時代より室町時代に至る間は大體似寄つた公定量が行はれて居つたもので、長保延久の宣旨は非違の檢定であつて公量の改制ではなく京桝四合餘のものであつた。しかし平安朝以來更に大量な私量も行はれ室町時代には京桝一升程の桝や、それ以上のものも行はれたが天正十四年に至つて秀吉は私量中の大なるものを標準として京桝九合五勺弱のものを公定し之を强制したのであるとし、「紀州田邊に於ける座の研究」(脇村義太郎、史學)は同地に於ける鹽、破物、魚類、烟草、鐵砲類、鑄物の座に就いて說明し、田邊に於ても座は最初は專業者の團體卽ち組の意義であつて、終には問屋と同じ意義のものとなつたとし、必要品の製造販賣者を保護し以て城下町一般の繁盛を來さしめん事と、座より冥加錢を取りて一藩の財政に資した事とは座を發生せしめた原因であるとして座なるものが人爲的に出現した一例を述べて居る。次に「中世の竹生島」(同人、同誌)が淺井氏の竹生島を軍事上の目的に使用した證左はないけれども、見樣によつては同氏の軍需品貯藏所であつたかも知れないと言へるは面白い見解であらう。また「日本貨幣史」(瀧本誠一)が上古中世及び近古に於ける貨幣流通狀態や私鑄を槪說し、德川時代に於ける貨幣の沿革を文祿より元祿に至る貨幣の變遷元祿より正德に至る貨幣の變遷、正德より元文に至る貨幣狀態、南鐐二朱銀の發行、文政以後の貨幣の沿革の數項に分ちて極めて懇切に說明せるは、「江戸時代以前の物價調節策」(柴謙太郎、歷史地理)を見て王朝時代は物貨の公定消費の制限、貨幣の新鑄によりて物貨を調節したが王朝末から鎌倉時代にかけては宋朝錢の流通を禁止する事が最も必要な政策となり、明應以後は撰錢の禁制を以て之に當つたのであるとし、更に別に「室町時代の撰錢及びその禁制に關する考察」(柴謙太郎、史學雜誌)に於て選錢は選び取るに非ずして選り除けるの意味のもので室町時代末に起つた特殊の事象であり、物價變動とは直接何等の關係も持たない。其の禁制は撰錢行爲の禁止を目的とするのみならず善惡兩貨の併用を規定しやうとする貨幣流

通政策であり、他の一面から見れば物價調節策に外ならない。從つて選錢の行爲も禁制もグレシャムの法とは全く沒交渉の事象であると言つて前年に現はれた渡邊博士の說を駁したのは注意すべき說である。〔中村直〕

文學の方面では「萬葉集より古今集へ」（吉澤義則、歷史と理地）は萬葉と古今との歌風の差異は、嵯峨より文德に至る四五十年間に亙る和歌の暗黑時代に因りて釀されたものであると斷じ、「歌人大伴旅人の生涯」（澤瀉久孝同誌）は彼を目して悲痛に傷き易い感情の持主ではあるが、其對象が過去るを再び明い光を見出し得る性情の人であつたと考へ、「本居宣長と上田秋成との論爭に就いて」（岩橋小彌太、同誌）は其論爭の大要を紹介して、古典を無批判に尊崇して一般の傾向に反對せる宣長の思想と、古典の內容にかなり自由な意見を有し而も戲作者肌であつた秋成の態度とは到底一致する事が出來、かつたと云ひ、「兵庫の富商と文事」（古田良一、同誌）は兵庫の文事の稍見るに足るに至つたのは德川中葉慶見保具の出でた以後の事であつて、蕪村旭莊の渡來に刺戟され、浩

然が私塾を開くや兵庫の學問敎育に及した影響は少くなかつたと述べ、「歌僧としての僧正遍昭」（有川武彥、龍谷大學論叢）は遍昭の人物を評して洒々落々たりとし、「施頭歌について」（胡山生、國學院雜誌）は其發達を說いて、其短命なりしを、形式が餘りに整齊の美に顯著であつた爲め却て倦怠を生じた結果であるとし「增修百人一首講話開題」（逸見仲三郎、同誌）は定家と蓮生とが小倉山莊の爲めに共撰したのを、後に爲家爲氏の手をも經たのが今日の百首であるが、二條邸に於ける定家自撰の色紙歌と彼とを混同したる結果區々の說を生ずるに至つたものであると云ひ、「拾玉和歌集と隆寬律師の風吟」（橋川正、合掌）は慈鎭が和歌の上で隆寬と交通のあつた事を紹介し、「蓮如上人の和歌」（同人）は其詠百八十三首を蒐集し、附錄として蓮如上人に關する史料の二三等を載せ、「香川景樹のしらべに就いて」（吉澤義則、藝文）は彼の說けるしらべは內容の相違に伴ふものと、和歌としての一定のものとの二種であるが、彼は此差別觀を判然意識して居なかつたらしいから其の說は不徹底に終つたと

論じ、「中島廣足と長崎」(久保猪之吉、心の花)は廣足の長崎時代を說く事詳しく、「ひさかた考」(山田孝雄、同誌)は古代に於て天空を日常使用せる蒲の形に似たと考へた結果、ヒサゴガタと云ふべきを故意にコを省いたか或は自然に省かれてヒサカタとなり天の譬喩に用ひられ後日月雨都等の枕詞ともせられるに至つたものと解し、「大報恩寺佛體內所現和讃考證」(志田義秀、同誌)は此詞章と梁塵秘抄の法文歌との間には必ず何等かの關係あるもので、本詞章全部又は一部は同時に或一人の手によつて連作され、歌謠ではなくて和讃で、天台家の製作なる事が認められると云ひ、「三條西實隆と源氏物語」(山脇毅、藝文)は實隆の聽き及行つた源語の講義に關して縷述し、「平家物語著述の資料に就きて」(後藤丹治、同誌)は閑居友は平家の典據となつた事を推察し得られるが、隆房卿艷詞六代勝事記海道記東關紀行等との關係は長門本等には餘り認められぬと考證し、「鴨長明伊勢記考」(同人、同誌)はこれによつて當時の伊勢の歷史地理伊勢神宮の故事典禮を研究する上に一資料を得る事が出來ると論じ、「類聚名義抄に就いて」(岡田希雄、同誌)は其著述年代は平安末期又は鎌倉初期なるべく著者は恐らく眞言の法師と想像され、內容からして和名抄より後の產物で兩者間には直接の引用關係あるらしく、且著者は廿卷本系統に屬するらしき和名抄をも參考して居たと云ひ得られると說き、「高山寺本類聚名義抄攷」「西念寺本類聚名義抄攷」(同人、同誌)は何れも之と姉妹篇である、「下河邊長流の學問に就いて」(岩橋小彌太、同誌)は長流の歌學は萬葉研究を中心としたものであつたが未だ其和歌及精神を眞に理解するに至らなかつた爲めに、國學は尙ほ長流には迚らなかつたが彼に負ふ所は少くないと論じ、「靈語通論」(同人、同誌)は上田秋成の假名遣に關する考を不眞面目なりとし彼を標音的假名遣論の先驅者とするは穩當でないと駁し「契沖阿闍梨雜事」(同人、歷史地理)は彼と長流似閑見林及兄下川氏との關係に就いて其傳記に新しき光を加へ、且、彼の古假字法の發見は獨創的なりと云ひ、「甲斐の國學と萩原元克」(彌富破摩雄、同誌)は甲斐の國學は初

京都搢紳家の流を汲む物であつたか元克が出て伊勢の復古學的國學を輸入し、彼の死後は古屋氏の家學のみ隆盛を極めたこと、元克の傳を詳敍した「五山文學論」(那波利貞、室町時代の研究)は五山文學の開祖として雪村友梅を擧げ五山僧侶の儒釋兩學研究の着眼點は、儒僧となりて佛道と支那純文學の製作とに卓越せん事を期するにありたりとし、「文藝奇蹟譚の成立」(阪倉篤太郎、同書)は文學藝術の功力に關する說話は室町時代に於て成熟せる形式を備へ、殊に和歌の功德藝能の奇特を闡色せるものを生じた事は最も注意すべしと說き、「芭蕉研究」(樋口功)は芭蕉以前の連歌俳諧芭蕉の經歷人物俳風其變遷芭蕉歿後の蕉風及芭蕉に關する參考書一斑を叙し、「芭蕉野ざらし紀行評論」(荻原井泉水、早稻田文學)は貞享以後に於ける芭蕉の句境展開の跡を檢討し、「江戸文學と都市生活」(山口剛、同誌)は江戸都市文學が俳諧精神と絕緣すべくして相離れ難かつた關係並に洒落本に現はれた江戸人の通の生活を詳述して居る。

次に學術教育等に關しては「山片蟠桃翁の事蹟補遺」(龜田次郎、國學院雜誌)は翁の主家山片家が元來兩替屋でなかつた事翁の墓所は大阪天滿東寺町善導寺なる事翁の生年は寛延元年で我國地動說の鼻祖は翁なる事を說きて一般の誤傳を訂正し、「寺小屋の淵源」(高橋俊乘、歷史と地理)は僧侶養成に努めて居る間に其餘業として俗人に習字讀書を敎へる樣になつたのが元で、寺院敎育は遲くとも鎌倉末期には有つたものと見られると云ひ、「江戸時代に於ける公家階級の女子敎育」(櫻井秀、史學雜誌)は其敎育方法並課程を細敍し、有職國史の素養ある事と儒敎的訓練よりも情趣ある敎化を主としたことは武家と異る著明の點なりとし、「頒曆史談」(木村春太郎、神宮皇學館史學會々報)は曆の語義沿革より古來の曆頒布の方法狀況及獻上曆に就て說明して居る。

風俗方面の研究では「平安朝初期の女裝及其社會的背景」(櫻井秀、史林)は初期の女裝は社會的影響を受けて全く唐式を中心的服飾とし奈良朝式典型の延長完成に外ならぬと云ひ、「平安中世に於ける女裝の構成及種類」(同人、考古學雜誌)は定型的構成服飾附屬品衣服朝服の變

化及官吏庶人の家庭的服飾に就て述べ、「平安季世に於ける女裝の變化とその背景」(同人、歴史地理)には理髮の風俗及用具化粧法服飾構成及形態の推移に就て說き、「藤原式女裝考」(同人、國學院雜誌)は其女裝の一々にて細密なる研究を發表し、「西鶴本に記されたる女子の容姿」(江馬務、風俗研究)は西鶴本中の女子風俗を分列擧して說明し、「平安朝初期に於ける女裝の變革に就て」(同人、同誌)は奈良朝の唐風は嵯峨帝頃より漸次國風化し圓融帝より藤原氏盛時に至る迄の內に全く唐風を脫却し盡せし事を論じ、「美豆良考」(同人、同誌)は開闢以來行はれ來つた髮風として最も命脈の長い物の一で外國風俗の影響又は時勢の風潮を受けて其種類を增加したが依然後世に踏襲せられ婦人の下髮と共に髮風の二大系統をなした事を述べ、「萬歲とその服裝の變遷」(同人、同誌)は萬歲の起源を男踏歌に猿樂田樂の分子の混入せるものとし、服裝其他に就て說き、「毬打ぶり〳〵と羽子板の新研究」(同人、同誌)は毬打は正月の卯槌卯杖の應用されし物羽子撞の根本的意義は邪鬼を去る事振々は毬打と同一の物より出で江戸時代に自ら別のものとなつたと云ひ、「近世に於ける京の舞妓」(櫻井秀、同誌)は上品な舞踊藝術者であつて藝子の候補者ではなく且躍子とは別個の發達をしたものであらうと考へ、「賀留多の傳來と流行」(新村出、藝文)には天文末期或は永祿頃葡人に依るを最初の傳來とすべく、天正カルタも元來ウンスンカルタの別稱を有して居た物であり、遊女の名カコヒ、キンゴ俗語スベタ町名ポント等は元賀留多用語より起つたものであると述べて居る。

次に歌舞演劇關係では「壬生狂言源流考」(吉澤義則、室町時代の研究)は祇園御旅所關係の田樂が壬生寺の大念佛に結付きそれが策僧によりて因緣付けられて江戸時代初期に生れ出でたものと見、閻魔堂釋迦堂の狂言共に壬生を眞似たものであらうと云ひ、「室町時代の能樂」(岩橋小彌太、同書)は其作家所作音樂猿樂の徒の社會的地位猿樂の座等の諸方面より之が說明を試み、「能樂に於ける假面使用の意義」(岩崎眞澄、思想)は能樂に於ては面を用ふるが本來的でワキ其他の附隨的人物が一般に之

を用ひないのは能樂がシテ中心の假面劇なる事を意味し又最も寫實的な現在物が面を用ひないのは假面の性質に基く理由以外能樂の本道から云つて傍系的のものもなる事を物語るもので、實際上面が能の位を規定するよりしても面は能樂の中心的なものであると云ひ得られると論じ、「能は一人本位の演戲である」(野上豐一郎、同誌)其理由は能が其發達上物眞似を本體とすると子方使用の心理等より考へて然りとなし、「女形の起原及完成の史的徑路について」(櫻井秀、史學)は女形の原流を平安朝社會に於ける風俗上の男女性交換の習俗に求め、鎌倉室町時代に於ける此風習の例證を擧げ古人の女形を賞美せしは女優によりて代償し得べからざる美點を認めたのに基くであらうと論じて居る。

更に美術建築の方面を見るに「天壽國曼荼羅に就いて」(中川忠順、愚想)は其材料方法を說き臺裏の裏面に紙を當てたると二段量綱法の使用と五種の刺繡法の現今のそれと何等相違なきとは注目すべしと云ひ、「繪卷物について」(上野直昭、同誌)は一般に繪卷物と云へば必ず何等かの意味に於て時間的意味を有し如何に此時間內容を取扱ふかによりて種々の形式を生じ從つて之を形作るべき手法の差が導かれ、之が又內容に影響して內容は又形式を規定し一方には色彩派が生れ他方には線條派が生じたけれども現存繪卷物には折衷的の物が少くないのは表現目的が各他を含む所から生じ技巧の歷史的背景に從つて題材の內容からも規定されるからであると論じ、「子嶋曼荼羅に就て」「再び子嶋曼荼羅に就て」(瀧精一、國華)は裝飾的隈取衣紋の集合線條に依る陰影法を特徵とし唐末の支那作と鑑定し、此畫か白描法を採用したのは賢明な手段で紺地に金銀泥を用ひた筆法には特殊の美感があるとし、「鎌倉古寺の什寶」(同人、同誌)は建長寺圓應寺の繪畫彫刻に就て說明し、「男衾三郎繪詞に就て」(藤懸靜也、同誌)は其風景畫に秀で武人の動作を描くに特技を有し人物の表情を寫すに巧である事、製作年代は南北朝初期なるべく地方の武人を題材としたるは注目に値すべき事を云ひ、「良全に就て」(同人、同誌)は良全と良詮とを同一人と見るべく其號を可翁と稱したが別に宗然可翁と云

へる禪僧があつて　此混同せられ可翁とは宗然を指すに至り良全は閑却せられたが、彼は南北朝頃佛畫に長ぜし元の歸化禪僧で我國に宋元系統の畫風移入に大功ある一人であると說き、「鎌倉時代に於ける鎌倉の庭園」(外山英策、同誌)は主として吾妻鏡に依りて當時の著明なる庭園の模樣を紹介し、「浦上玉堂と釧雲泉」(古川修、早稻田文學)は其傳記人物を敍し又作畫を評して玉堂は象徵的雲泉は理想主義の藝術家なりとし、「高山正之の肖像に就いて」(和田信二郎、歷史地理)は華山筆の物は立原翠軒像の下繪の一種で高山操志所載の物は翠軒像の下繪を粉本としたといふ說があり、現在の所栗田博士所藏菊地容齋筆の物が最も信ずるに足ると云ひ、「林業家より見たる古建築」(江崎政忠同誌)は法隆寺の如き最古の木造建築を保有し得たるは良樹種良材の使用製材及濕氣に對する建築上の注意保存の注意裝飾的塗料の防腐的效果及土地の乾燥に因るもので其用材は附近山林より伐採されたものであらうと云ひ次で大佛殿の構造用材產地伐採搬の出方法を詳說し、「氣比神宮の桃太郎の彫刻に就いて」(源豐秋、歷史と地理)は桃山時代の此彫刻は國民的童話の最古の史料としての興味と共にかゝる說話を建築彫刻に應用せしものとしても注目すべきであるを述べ、「烏居の研究」(大須賀眞藏同誌)は名稱起源品質形式構造變遷の經過他の建築物との關係に就て述べ「桃山時代の建築」(佐々木恒淸、同誌)は其實例の一々に就て說明し、「喜光寺金堂」(天沼俊一、同誌)は現物より研究すると此堂は室町時代建立の奈良式明層採光裳層附佛殿で珍しき建築と云へやうと云ひ、「鹿苑寺金閣の建築」(武田五一、室町時代の研究)は金閣の價値は當時の建築界の特長を現はし大體寢殿造と佛殿造との二者を集めそれに和樣唐樣を併せ使つた點にあるとし、「室町時代の美術工藝」(佐々木恒淸、同書)は彫刻を除いては何れも未曾有の發達をなし而も皆美的價値の高かりしは宋元文明の影響と歷代將軍の美術癖に由るもので、作品の眞價は其表現の淡洒な點に存すると論じて居る(中村喜)

宗教に關するものを先づ古代信仰神道及神社の側から一瞥すると「墳墓の祭典に就いて」(本多辰次郎、中央史

壇）は上代に於ては靈魂の死後の存在を信じたがそれに肉體に依憑する場合と、遊離する場合とが考へられ、前者の祭祀が靈前祭で後者のが墓前祭であること、大神出雲諸社は陵墓か神社となつた例であること、佛式では狹穗山の眉間寺を始として墓側に寺院を建てゝ亡靈を供養したこと又墓に塔婆或は堂を建てたのが寺院になつたことを說き「我が上代に於ける道家思想及道敎について」（黑板勝美、史林）は日支の交通は非常に古く道家思想も早くから輸入せられ儒敎を請來したと思はれてゐる王仁の如きも道敎の浸潤してゐた樂浪地方から出たので彼や阿直伎の子孫なる文氏が大祓に奏する呪文の如きも道家思想であり、其風が神社の祭式に及ぼした影響も甚だ多く紀記の傳說に於いても道家思想で解せらるゝものがあり葛城生駒山等の奇神の記事も其處に道觀のあつたことを意味し役行者も其最後の殉敎者であつたかも知れず古墳から出る東王父西王母の銘ある神人鏡の如きも單なる愛好品と見るべきでないといひ、「傳敎大師と山王神」（山田惠諦、叡山宗敎）は大師が大宮二宮を山王と稱したのは兩部習合の下心があつたので、傳述一心戒文によれば二人の年分度者を奏請せられたのも護法の爲のみならず本尊と山王神とに報謝せんとしたのであるといひ、又大師に本地垂迹思想のあつたことを相輪樓の銘で證しようとした「諏訪神社の研究」（八代國治、國學院雜誌）は諏訪の上社の寶殿はもと本殿で本殿がないと思はれたのは本地普賢菩薩の遍一切の義から起つた思想であらう又上下兩社にある御柱も四天王四神生殖器崇拜の變形であるといはれてゐるけれども寧ろタブーの一種であらうといひ「淡路國鳥飼別宮に就いて（宮地直一、歷史地理）は社寺の所領に本宮を分祀して其の鎭守となす事の一例として鳥養庄について論じたものである。「水天宮の研究」（及川儀右衞門、歷史と地理）は久留米にある水天宮の本社尼御前社の祭神は其の名に就いて海神とも安德天皇及二位尼又は河童ともいふが、原始的の信仰では水神で雨乞の語の轉化であらう、江戸の水天宮は元祿の久留米藩邸火災後に火風の兩天宮が祀られ其後火除の神として水天宮が祀られ當時諸侯邸內神の流行につれて繁昌し本國の

尼御前と關係づけられて水天宮の名が久留米に逆輸入するに至つたといつてゐる次に佛敎の方面を見るに「元興寺考」（竹島寬、史學會々報）は醍醐本十八帖緣起の元興寺緣起及資財帳を根本史料として元興寺の創立事情を明め書紀に見ゆる法興寺創立の記事と對照して兩寺を同一と見、百濟の彌勒石像の安置せられたのは櫻井寺で元興寺ではないといひ、又緣起によつて法興寺に置かれた佛像も銅像であるとなし、其の他書紀では法興寺が三大寺の一に數へられる程の大寺であるのに續紀では獨り元興寺の事丈の見えてゐるのは兩寺が同一である事を示すので萬葉集に元興寺を飛鳥寺といつてゐるのも亦其一證であるといひ「東大寺壽靈の華嚴學に就いて」（島地大等、哲學雜誌）は壽靈の華嚴五敎章指事記は鑑眞の天台章疏請來から空海の新譯將來迄の間に成つたものであるが彼は興福寺の慈訓の學系に屬するものらしく其研究態度は賢首を祖述して居り至相海東靜法等を異端視せず他宗に對しては三論に論及する事少く法相に深く殊に天台の章疏には非常に尊敬してゐるといひ「傳敎宗敎の生命」（櫻井圓信、叡山宗敎）は傳敎大師以前の宗敎が學の宗敎で大師のが行の宗敎であるのは大師の偉大な信仰と日本人として實際的感情的な國風に依據し又聖德太子の影響と末法逼迫の思想とに基くものであるといひ「遮那業の起源に就いて」（熊田龍雄、密宗學報）は大師の著書には僞撰が多く夫に見ゆる圓密統一の思想も疑はしく遮那業は慈覺智證兩大師に始るといふ說もあるが親撰疑なき顯戒論に合一的法門があるから其の起源は旣に彼にあるが更に支那に淵源して居るといひ「御遺告に就て」（龜尾子美同誌）は空海眞撰の遺告として全集に收められてゐる六種は四種の遺告と二種の遺誡とに分つ事が出來るが遺告は（一）承和元年十一月十五日付のもの（二）二十五箇條の遺告（三）眞然に與へたもの（四）諸弟子に與へたものであつて、何れも自叙傳の形式を採り其記事大略同一であつて恐らく第四が其原型であらうが、文辭に和習を帶び遺告の體をなさず自贊の語神秘的な記事あり且つ三敎指歸や請來目錄の記載と矛盾するから僞撰で其の他は推して知るべく大師の親撰と見るべきは二種の遺誡の內所謂承

和の御遺誡のみであらうといつてゐる猶ほ兩密事相の相承に就て「寫岳に於ける灌頂について」（櫻井貫道、叡山宗教）は書寫山に於ける灌頂は（一）寫岳灌頂（二）葉上灌頂（三）山家灌頂の三流の相承があるが（一）は永觀二年性空が親く金剛薩埵から兩部大法の印明を授かつたに始るといはれ（二）は上野長樂寺琛海が榮西の儀軌密具を請來して正安三年に大衆に授けたのが始で（三）は乘林房快仙が文龜三年に山家の光宗流合坦灌頂を受けた事から起り後大に榮えて却て叡山に逆輸入したといひ「慈深方の相承に就て」（長谷川寛勝、密宗學報）は東密小野派の内最も廣く行はれ行規口決の整頓せる水本報恩院の慈深方について派祖慈深は三寶院末流であつて勝海を教授阿闍梨としたこと彼の後に十二の異相承のある事を血脈で示し猶道教方との間に三寶院流の正嫡を爭ふも共に其の正派であることを述べ「兩統對立の反映としての三寶院の嫡庶」（辻善之助、歴史と地理）は後宇多法皇は慈淳に命じて道順に三寶院の嫡流を附屬せしめやうとせられた爲め慈淳は隆勝に瀉瓶付法し乍ら法皇の强請に依つて止むな

く秘軌聖教の一部を道順に與へたのが後日の紛爭の因をなしたこと法皇は隆勝に重寶を徵されたけれども隆勝は道具聖教を携へて鎌倉に奔つた爲めに法皇は道順を三寶院の嫡流とせられたが持明院統では隆勝の訴によつて彼を嫡流と認め後醍醐天皇の御宇には道順の後なる文觀を正流と認められたと說いてゐる。「恵心僧都と日蓮上人」（富森大梁、藝文）は念佛を無間の業として攻擊した日蓮は我國淨土教の先驅者たる恵心を甚だしく攻擊しないのみでなく往生要集は調機の方便で僧都の眞意は一乘要訣にあるといつてゐるのは彼が恵心流の台學を受けたからで、其法華開宗には必ず要訣に强いヒントを得たであらうといふに對して同じ問題を捕へた「慧心僧都と日蓮聖人」（小林是悲、法華）は鎌倉時代淨土教の勃興は末法思想と關聯してゐるが慧心の念佛思想には末法の意識が濃厚でない彼は天台圓教の大成者で止觀の妙味に滿足せず現實界に接觸するのが其本意であつたから、茲に口稱の念佛の要を認めたのであるが日蓮は慧心の事觀思想に影響せられてゐるけれども一乘要訣が單に三乘方便五性

各別を排し一切有佛性を主張するのみで諸大乘經は法華も淨土三部經も同一に取扱つてゐるのに反して日蓮は法華一乘を絶對視し久遠本佛の人格に歸依する所に大差がある。更に「吾祖の慧心僧都觀」(同人、同誌)は日蓮自身は始めは往生要集は調機の方便で一乘要訣が其眞意であるといつたけれども彼の思想に一大轉機を示した佐渡以後では往生要集は專修念佛でもなく選擇主義でもないのに專修念佛行者から流祖の一人として仰がれてゐるのは彼等が山門の攻擊を避ける爲めに利用したのであるが念佛橫行の緣は慧心に萠じて居り慧心は天台の獅子心中の虫であるといひ、一乘要訣については屢其日本一州圓機純一の語を引用するのみで內容には批評を加へてゐないといつた「平安朝に於ける法華信仰と彌陀信仰」(橋川正藝文)は平安朝は密敎熾盛の時代であるが晩年に至つて法華彌陀の信仰漸く現れ法華驗記や往生傳の著作が多數に出たことを述べ道長が法華經を受持しつゝ念佛した如く驗記に現れてゐる法華行者の願生者を兼ねたものが多數に上つて居り又往生記によつて其信仰が武士庶民の階級に及び彼等の間から持經者、聖、沙彌等が出て持經者の系統から日蓮、聖から法然、沙彌から親鸞の宗敎が出で又當時の信仰形式として造寺造佛が重んじられ功德を數量で計算したといひ「入宋僧寂照に就いての研究」(西岡虎之助、史學雜誌)は大江定基が愛妻の死により寂心の室に入りて得度し源信と仁海とに台敎と東密とを學び聖蹟巡禮の爲め入宋した其の年には諸說あるが長保五年を正說とすることより入宋後示寂に至る迄の事蹟を說いてゐる。「日本に於ける佛敎史家の先驅並に其の著書」(大屋德城、宗敎研究)は凝然の三國佛法傳通緣起の先驅として少納言信西の子なる覺憲に三國傳燈記の著のあつたことを紹介したものである。「法然上人諸傳成立考」(中澤見明、史學雜誌)は法然の傳記中源空聖人私日記は最古のもので法然滅後十六年から嘉禎の頃までに信空門下の手に成り流布本に上西門院が高倉天皇御宇に法然から得戒せられた記事中御宇の字字を脫したから後の諸傳皆門院と天皇と共に受戒せられた樣に記してゐるといひ「法然上人文集としての漢語燈錄印本に對する決疑」(藤原猶

雪、歴史地理)は義山校刊の漢語燈錄と二尊院本惠空本の所謂古本と對校して異同甚だ多きを指摘し編者了惠著無量壽經抄選擇集大綱抄に引用せる法然の無量壽經釋が古本に同ずる事等により義山本は彼が鎭西流宗義に符合せしむる爲めに改竄を加へたものだとなし「禮拜得隨」(和辻哲郎、思想)は道元によれば眞理を體得するに必要なものは第一に導師で第二に精進であつて、其の究極の契機は身を輕くして法を重くする事である人は其の保持する法によつて價値が定まるのであるとし當時の社會階級を無視した、人類平等觀に徹底したのは念佛宗であるが其の立場では彌陀の救濟の前には一切の努力は意味がない道元の法は人格的存在でなく人間に保持せらるゝことによつて活動する、人間は佛に救はるゝのではなくて自ら佛になるのである、道元は永遠の理想なる法への努力に意義を與へ人類の文化を肯定したものであると說き、「道元の佛性」(同人、同誌)は道元は涅槃經の一切衆生悉有佛性の句に極めて特異なる解釋を與へ悉有を普遍的實在の意味に解し悉有が佛性なのであると說いたそれより

して又四祖の無佛性の語も悉有卽無であつて無も亦佛性なのだと解したかくて佛性は悉有又は無によつて現はされそれを體得し住持する事が卽ち解脫成佛でそれに達するには專心打坐すべきであるといひ「道元の道得」(同人同誌)は道元は佛法の流通は唯佛與佛の境界である事を主張すると共に言語による概念的表現をも貶けず敎外別傳の標榜を排斥した言語による表現はそれのみにては眞理を受ける事が出來ぬから所謂面授面受によらなければならぬ而もそれは佛祖によつて言語の上に表現せられてゐるのでかゝる眞理を道得と呼び諸佛諸祖は道得であつて道得中にあつて古往今來修果し工夫し辨道するのであるといひ「道元の葛藤」(同人、同誌)は人間の見解は人每に相違し思惟は必ず葛藤を生むので禪宗では思惟を葛藤だとして斥けたけれども道元は葛藤こそ佛法を眞に傳へるもので葛藤が無限に葛藤を生じつゝそこに佛法の道理を會得して行くのであるといつて葛藤の語は畢竟解くべく課せられた課題を意味すると論じた昨年は眞宗開宗六百年記念法要が營まれたのに因んで親鸞及其主著敎行信

證に關する論議が盛であつた、先づ「親鸞聖人は山門の堂僧なり」(鷲尾教導、龍谷大學論叢)は惠信尼の消息にひへのやまにたうそうつとめておはしましけるがこあるのを引いて親鸞が叡山で學生の驅使の用を辨ずる卑しい堂僧であつたといひ「淨土系譜に顯はれたる親鸞聖人」(山上正尊、佛教研究)は凝然は親鸞を知らなかつたから淨土源流章にも載せねば其の手に成つた元亨釋書にも漏らしてゐるけれども靜水の法水分流記には第五位に大谷門徒を掲げてゐるが後世淨土宗側の編した諸系圖は何れも眞宗を省いてゐるのは皆宗情を挿んだもので次で鎭西流の玉泉の手になつた宗派流傳には親鸞を黑谷門下の末位に列し蓮門宗派中の第二圖淨土源流章圖中の第四圖には善惠の下に列して西山の會孫弟となし懷山の總系圖には善惠の下に綽空を列ね背師自立の項中成覺法本の次に親鸞を列したがこれ等は何れも眞宗々祖に對する惡意ある誣謗であるといひ「親鸞聖人と四十八卷傳及九卷傳の記事に就て」(中澤見明、龍谷大學論叢)は親鸞の房號を善信といひ九卷傳に越後に幸西の弟子善心房が一念義を立てたといふ記事のある事から親鸞を一念義といふが九卷傳は四十八卷傳の後に出で、鎭西流の人の手に成つたもので四十八卷傳では善心の名は見えないのを九卷傳には反對派の中心人物を陷れる爲めに揑造したもので漢語燈錄の遣北越書も同じ系統のものから同じ目的で作爲せられたものであるといひ、「愚禿親鸞と愚勸住信」(禿氏祐祥、同誌)は親鸞が自ら稱した愚禿とは薄德無智の比丘の意で最澄の入山發願文中の愚中極愚狂中極狂麁禿有情底下最澄の語に採つたのであらう聖覺の著といはるゝ十六門記にも自ら愚禿と稱してゐるがそれが實に聖覺の自稱したのであるならば此の點に於ても兩者の關係を想像する事が出來る私聚百因緣集の著者住信が愚勸と稱したのは愚昧な談義僧の意で親鸞に倣つたものであらうといつた。「宗教改革と親鸞聖人の眞宗」(松本彦次郎、同誌)は親鸞ばかりでなく法然や日蓮も自ら一宗を開くことはいはないが選擇の態度は明瞭にしてゐる。教行信證も信行不離の信仰を告白した一の新しい經典である親鸞の宗教は歐洲の宗教改革と共通の所があるルーテルが獨逸語を

尊重した樣に親鸞も生の眞の表現を日本語に求めてゐるといひ「親鸞聖人の思想の三轉」(日下無倫、合掌)は教行信證化身土卷に於ける告白によつて信仰過程を三期に分つべしといひ登山後關東草庵に於ける寛喜三年頃迄は自行の時代以後歸洛までは化他の時代歸洛後隱棲の間は信仰圓熟の時代であるといつてゐる、次に其著述に就いては「親鸞聖人著述總論」(橋川正、佛教研究)は親鸞の著述の主要なものは教行信證と三帖和讃とで前者は大經中心の宗教を開顯したもの製作は元仁元年頃に初稿がなり晩年に加筆せられ終に完成しなかつた代作説もあるが此の內面的の表現と整然たる體系は賈文者流のよくする所でない後者は宗教原理と其歷史とを謠ひ物としたもので、和讃の先驅者は空阿であるが親鸞のはそれに比して修辭の技巧を弄せず思想は眞率である建長七年は善鸞が阪東の門侶を混亂せしめた年であつた爲めに親鸞は多數の書狀を東國に送り尊號眞像銘文淨土文類聚鈔三經往生文類愚禿鈔等を著したりして門侶の向ふ所を示した翌年も亦多數の名號を書いてゐるのは歸依の對象が名號である事を示したので其年入出二門偈四十八誓願の著があり又西方指南抄に筆を染め翌年には唯信抄文意一念多念證文を著したが何れも法然所傳の念佛思想を明にせんとするものであるといつてゐる教行信證に就いては前年に論議せられた親作否定論に關する餘沫がなほ飛散してゐるけれども枝葉の問題に就いて諍はれてゐるに過ぎない、たゞ新に其の代作者の推定説として「大夫房覺明」(喜田貞吉中外日報)「實在の大夫房覺明」(同人、歷史地理)は覺明は其著佛法傳來之次第によるともと南曹北堂遊學の末生で近衞天皇の御宇に入山得度し黑谷にあつて修行し後信救と稱したが能文で三教指歸の註を著し或は鎌田政家の女の爲めに得長壽院の願文、足利義兼の爲めに鶴岡の願文を記してゐる本願寺通紀に此の覺明が後に西佛と稱し親鸞の弟子となり康樂寺の開山となつたとあるから教行信證に代作者があるならば其代作者と認むべきものゝ一人であるといひこれに對して「傳説の大夫房覺明」(中澤見明、同誌)は西佛の事が最も早く物に見えるのは寛文三年の御傳繪詞照蒙記でそれには康樂寺物語を根據とし

て居る丈である寺傳では西佛を眞田氏の祖なる海野小太郎幸親の子とし　るるがこれは後に領主と關係を付ける爲めの作り事であらう在叡時代から親鸞に隨從して居つた筈の西佛が門弟の交名牒に見えないのはおかしく七箇條起請文に西佛が二人まであるから其名を詐稱してもボロが出る心配がないからこれに附會したもので畢竟覺明の西佛房は傳說の人物であるとした「敎行信證著作の意志及その年代に就て」(同人、佛敎研究)本書の著作は開宗や敎團設立の意志ではなくたゞ法然の眞意の惑亂せらるゝに憤慨して作つたものである其年代は法然の十三回忌に着手せられたものだらうとの說もあるが度々廻り來るべき年忌などに深い意味を認めたのではあるまじく又元仁元年說も定說の樣ではあるが惠信尼の消息によれば寬喜三年以後化他の行に意を用ゐたといふことであるから晩年の作であらうといひ「敎行信證の成立より見て」(大須賀秀道、合掌)は本書は親鸞の主觀に於ける一念の信の表現的展開で此の一念は吉水入室の時發起したもので其內省の資料は入室以後に見た經論釋でありそれを通じて體驗の內容を深めてゐた其展開を表現したもので立敎開宗せんが爲めに著したのではないといひ「敎行信證に就いての感想」(金子大榮、同誌)は敎行信證は勿論內容から研究せらるべきであるが其表現の特異の印象にも注意すべきである親鸞以前の諸祖の著作では懺悔と讃仰自證と化他とが並列せられてゐる感があるが本典では皆一に歸してゐる此不思議な一致は本願力廻向の體驗から來てゐる次に引用文の讀換に就いては或は親鸞の無學に歸し或は叡山天台の傳習であるといふが寧ろ文字を離れて直接に原典著者の心に接したものである更に同時代の高僧の著書と比較するに貞慶や一遍の如き悲哀なる無常觀なく道元の如く超越的でなく日蓮の如く情熱的でないと論じてゐる「敎行信證流傳史の一節」(橋川正、佛敎研究)は證如の天文日記によつて石山本願寺に於ける本典傳授の狀を叙したものであるが其他書史的研究では「敎行信證古寫本の種類及その最古の註疏」(日下無倫、同誌)「東本願寺所藏敎行信證延書のこと」(同人、同誌)等がある和讃については「詩人としての親鸞」(廣瀨南雄、合掌)

が親鸞の詩と見るべきものは教行信證正信偈入出二門偈頌其他の和讃であるが著書全體が非常に印象的な表現である彼の詩の内最も詩人的な創意に富んだものは入出二門偈で熱情に滿ちたのは悲歎述懷和讃である讃彌陀偈和讃や正像末和讃等は翻譯ではあるが立派な創作といつていゝといひ、又「親鸞聖人の消息文に就いて」（秀氏祐祥龍谷大學論叢）は親鸞の消息の現存するもの四十二通を數へ内御己證と稱する五通は消息の體ではなく來訪の門徒に與へた法語であらう現存の自筆のものは九通あり又轉寫のものには顯智專空善性の三系統ありこれを編纂したものに血脈文集御消息集末燈鈔の三書のあることを示してこれが解說を與へてゐる又「書簡より見た親鸞聖人」（橋川正、合掌）は其の消息に基いて隱棲後の親鸞と地方の門侶との關係を巨細に說いてゐる此他の著書に關する研究では「淨土文類聚鈔に就て」（大須賀秀道、佛教研究）（淨土三經往生文類と往還廻向文類」（加藤智學、同誌）「三經往生文類に就て」（鷲尾教導、同誌）「一念多念文意の研究」（山上正尊、同誌）「入出二門偈頌の研究」（廣瀨南雄、

同誌）等がある次に「聖親鸞の妻帶問題」（村上專精、丁酉倫理會倫理講演集）は佛教では小乘でも僧侶の妻帶の事實を認め翻して大乘では在家の妻帶者もなほ菩薩僧であり史上妻帶僧の例も少くはない親鸞の妻帶したのは聖德太子傳教大師教信沙彌堅覺法印に私淑したからで傳教大師私淑が妻帶の動機となつたといふのは末法燈明記に戒律嚴守の不必要を說いてゐるからである其の親鸞の妻帶が教界に問題となつたのは德川時代に淨土宗と眞宗との間に於ける不和に基いたものであるといひ「眞宗の原始時代に於ける妻帶」（長沼賢海、龍谷大學論叢）は天下三分の一は僧侶で肉食妻帶が普通であつた時代に於て獨り念佛者の妻帶のみが問題にせられんのは公然教義上から肯定したからであらう老松堂行錄に長門の阿彌陀寺に於ける僧尼同棲の狀を寫してゐるが同樣なことは眞宗にもある原始時代の門侶は遁世の覺悟を忘れずして同時に人間生活を尊重したのであると說いた「法然親鸞性信の三代傳持の血脈相承」（梅原眞隆、龍谷大學論叢）は血脈文集の内親鸞の消息でない法然以下流罪の事を記した

一文があるのは特に法然親鸞の間の血脈相承を證する爲めで如信の父慈信房義絶の消息を載せたのは性信系に對抗する血族系の法門相承を否定せんとする下心であると論じ、「本願寺三代相承論」（鷲尾順敬、同誌）は本願寺の親鸞如信覺如三代相承論は專修寺側から論議せられ本願寺は大谷御影堂を基礎とするもので御影堂は遺弟の協力になり覺信尼を其留守職とし其子覺惠孫覺如に繼承したもので三代相承ではないといふのであるが本願寺は親鸞法門の大道場で御影堂の變形ではなく親鸞如信覺如は法門の相承であると說いてゐる「眞宗本尊に關する研究」（禿氏祐祥、同誌）は親鸞傳繪や眞慧上人御問答によれば彌陀三尊　聖德太子を配した尊像が用ゐられてゐた外に尊號眞像銘文で知らるゝ通り尊號及先德の眞像に經論の銘文を記した本尊が行はれた銘文は講像の上に記される性質のものだから名號に銘を書く事は名號を以て方便法身の尊像と德を等しくするものと信じたらしい存覺袖日記にすれば南北朝時代には尊號尊像、光明本尊、列祖像先德眞像の五種の本尊が行はれ覺如存覺等自身もこれに

從つてゐたが其の統一は蓮如に端緒が開かれたものであるといひ「尊號眞像銘文と光明本尊」（橋川正、佛敎研究）は親鸞の尊號眞像銘文は名號と先德の眞像とに添へられた銘文を註釋したものであるが、其尊號眞像とは卽ち光明本尊でこれが最古の一と見るべき妙源寺のものは中央に九字名號、左右の兩幅に十祖と八祖とが描かれてゐる後には是等の群像と名號とを一軸とし又は左右の眞像の內の何れかと名號とを一軸にした略式のものが出來た光明本尊は雜曼陀羅より出で日蓮宗所用の十界曼陀羅と同じ系統に屬すと考へてゐる「眞宗寺院の古鐘」（禿氏祐祥龍谷大學論叢）には鐘の研究は眞宗に於ける寺院の形式發達を考へるに必要であつて古く寶悟記や私心記によつて山科石山の本願寺に梵鐘及行事鐘のあつた事を說き現存の眞宗寺院の古鐘正長元年在銘攝津勝福寺の行事鐘以下の六點について考證してゐる「眞宗と山門の關係」（松野遵崇、藝文）は最初禪宗が山門の干涉によつて餘乘を兼修した樣に眞宗も初は獨立する事が出來ず佛光寺は妙法院の進止本願寺は山門妙香院の指揮を受け後西塔院に末

寺錢を納めたこれは親鸞以來代々青蓮院門主から得度を受けたが青蓮院は又妙香院の門跡を兼ね西塔院を管してゐたからであるといひ「大谷破却の眞相」（廣瀨南雄、佛教研究）は大谷の破却は寛正五年正月の事で無碍光宗を唱へたことに原因する本願寺は山門の壓迫を避ける爲めに青蓮院と本末の關係を結び表面天台の風を裝ひ山門に對する義務を負擔したが蓮如は了譽が淨土宗をして山門の羈絆から脱せしめたのに倣つて獨立しやうとした爲めに遂に破却せらるゝに至つたのだらうといつてゐる「室町時代の教界と蓮如及び眞盛」（牧野信之助、室町時代の研究）は蓮如は其の法主となつた四十年間特に吉崎時代は實に眞劍の活動を續けたのである。彼は越前が父祖以來有緣の地で且つ此地に勢力ある甲斐氏と結托した爲に吉崎を獲たのであつて實に標本的要害の地であるがそれを選擇したのは交戰を豫期したからで彼と一向一揆との關係は否定する事が出來ぬ。寧ろ中世的色彩の濃厚で敬虔にして戒律を嚴守した眞盛とは好對照であるといひ、「蓮如上人の山科坊地占據について」（同人、佛教研究）は

蓮如が山門の壓迫から山門と犬猿の間にある寺門に親近し其の寺域の地に近松御坊を營んだ樣に山科占據も亦其地が園城寺の領地であつたからであらうといひ「蓮如上人門弟手原の幸子坊について」（橋川正、龍谷大學論叢）は蓮如上人一期記に蓮如は大谷破却後朝夕常隨給仕の弟子中の手原の幸子坊の道場近江栗太郡安養寺に七十日逗留したが手原は其の隣村であつてそこの圓德寺に蓮如眞筆の三帖和讃があり奥書に手原道場の常住物として與へた事が見えてゐるがこれは幸子坊の願によつて下附したものであらうといつてゐる「長島一揆に就いて」（佐々木芳雄、同誌）は長島は古來眞宗有緣の地で蓮如の子蓮淳によつて顯證寺が創められ其子實慧によつて維持せられこゝを中心とする教團の發展を見たことから顯如が信長に抗した時檄によつて起ち三河尾張美濃の門徒を集め石山の一羽翼の觀を呈したが遂に陷落した迄の經過を叙し「近江長安寺の創立」（牧野信之助、歴史と地理）は同寺に藏する古文書によつて石山開城の前後に當地方の門徒は顯如教如父子の間に等分の進獻をしてゐたが顯如が石山

を爭つてから父子互に信徒の爭奪をしたことより本願寺がこゝに別院格の寺院を興して山田道場といつたのが卽ち長安寺であるといつた「忍性菩薩良觀年譜」（橋川正、佛敎研究）は延慶三年證名著の性公大德譜を基礎として編んだものである。「天海僧正の圖書蒐集及大藏經印行」（今津洪嶽、東洋哲學）は天海の典籍蒐集は興隆佛法宗典保存の目的外に公武の諮問に應ぜん爲めの用意と一切經開板の素志があつたからで一切經の開板は弘安年間又南北朝の頃足利氏によつて試みられたが共に完成するに至らず慶長元和の間聖乘坊宗存が活字を以て印行を企て勿論完成はしなかつたが天海はそれに刺戟せられたると家康の大願とによつて家光に請ひ幕府の事業として活字版にて千四百五十三部六千三百二十三卷の印刷を全くした其部數は少くも十五部以上に昇るべく底本は思溪本により元藏を以て追加補足したものであらうといひ「了翁禪師とその敎化及び慈善事業」（大森金五郎、中央史壇）は了翁は經文弘布の志を立て錦袋圓の賣藥を販ぎて得たる益金を以て大藏經を購ひて寛永寺高野山其他二十一個寺に寄進し又寛永寺内に勸學講院を興し又天和元年の飢饉火炎等に賑給し廢寺をも興したといひ「黃蘗派の開立と龍溪」（鷲尾順敬、史學雜誌）は承應三年隱元の渡來した時相共に勸迎を圖つたのは妙心寺の僧龍溪禿翁竺印等であつたが中頃竺印は龍溪と議協はず妙心寺僧も亦隱元より離反するに至つた事より龍溪が隱元に西歸の思念ある事を傳へて屢々幕府に抑留の運動をしたのは實は黃蘗派創立の素志があつたので其結果遂に宇治萬福寺を創建し一派を開立するに至り龍溪は寛文九年に隱元より法を附與せられて黃蘗派の禪師となつた事を叙し「道者超元禪師の渡來と其禪風」（吉永擊驢槨、禪宗）は徑山費隱禪師は明末の巨匠で、其禪風を最も早く我國に傳へた者は法孫なる道者超元禪師であつて、隱元に先つ事四年に渡來し彼と共に長崎にある事二年其間兩者の關係は比較的薄く僅に偈の贈答があるばかりである、當時の渡來僧は媽姐堂に奉祀し在留唐人の弔葬を事とするのみであつたが道者によつて徑山黃蘗の禪風が流入した事が知らるゝや我國の沈滯した禪風に嫌らざるもの多く座下に參住した

道者は文筆に親しまず其南山道者禪師語錄は甚だ貧弱の感あるが、好箇の交通史料を藏してゐるといつてゐる。維新當時に於ける廢佛棄釋の事に關するものでは「日吉山王權現神改めの暴舉」（羽根田文明、叡山宗教）は明治元年神佛分離の令せらるゝや日吉社司樹下茂國生源寺等は七社神殿の鍵を引渡さん事を山徒に申込み交渉往復に時日の移るを見て遂に壯士及び坂本の人夫を率ひ神殿に亂入し法器佛像等を破棄燒却し山王を日吉神社十禪師を宇佐客人を白山比賣八王子を牛尾聖眞子を樹下神社と改稱した山徒は此の暴舉を憤り上訴した結果四月十日の太政館布告を以て兩部習合は禁ずべけれども粗暴の舉あるべからざる事を令し樹下茂國は始末書を徵せられたといひ「南洲寺の慶讃に就いて」（小畠文鼎、禪宗）は薩日隅三州の地は古來佛教の化に浴すること厚く大小の寺院千六十箇寺もあり中興の英主貴久の如きは佛を信ぜざるものは我が子孫にあらずと迄いつたに拘らず、明治維新の際極端なる破佛を實行し歷代藩主の廟號は神社名に寺院内の墓地にも新名が命ぜられたが明治九年信仰の自由を許

され各宗競うて布教した中に臨濟宗では獨園自ら下國して西南役後法第分巖の努力によつて南洲寺の創立せられた事を叙してゐる基督教に關する論著は極めて少くたゞ「聖フランシスサヴィエーの日本宣教」（櫻井匡、宗教研究）を見たのみであるがそれとてザビエルの生立より耶蘇會の事東洋傳道牛次郎に逢つてから日本に來て布教した迄を略述した小傳に過きぬ。近畿地方に於ける耶蘇教信徒の遺物に於いては「攝津高槻在東氏所藏吉利支丹遺物」（新村出、京都帝國大學文學部考古學研究報告）「京都及其附近發見の切支丹墓碑」（新村出、濱田耕作、同）「吉利支丹遺物發見の動機及び行事について」（藤波大超、歷史と地理）「北攝より發見したる基督教遺物に就きて」（橋川正、同誌）等がある。〔岩橋〕

最後に史料に關する研究として第一に擧ぐべきは「隱岐國正稅帳の研究」（澤田吾一、史學雜誌）であつて、大日本古文書に收めらるゝ天平四年隱岐國正稅帳を研究し數學的見地より計算して其の缺損部分を補塡し、完璧なる一國の正稅帳に還元したるものであつて、「古代の戶籍

計帳の研究」（同人、同誌）が統計を用ゐて年齢と人口との比例男女の比例、男口と課口との比較等を試み、それによりて口分田は必ずしも田令の規定通りに男二段女其の三分二を給與されたものでないと言つたのと共に、一つの新しい研究の試みである、其他「惠信尼文書の研究」（鷲尾教導）は親鸞の室惠信がその女覺信御房の許に遣付した、消息十一通を仔細に研究して一々に解說を與へ兼ねて口傳鈔に出て居る親鸞聖人の事傳はその一部は明かに根據のあるものであつて惠信尼の消息によつたものである事や、また聖人が山門にあつたときは堂僧であつたと言ふ重大なる史實をこれによつて確知する事が出來るとして居る。滋賀縣愛知郡金剛輪寺に寛喜二年二位禪尼追善の寫經を所藏し、竹生嶋寶嚴寺には文永三年の奥書ある北條時賴菩提のために供養せる大般若經六百卷ある事を報告した「二位禪尼追福の寫經と北條時賴菩提の寫經」（中川泉三、歷史地理）がある事を報告したものや元德二年六月十五日附の後醍醐天皇の綸旨を研究して大日本史の誤を正し、兼ねて既に此時天皇の胸中には鎌倉幕府のなかつたらう事を推察した、「後醍醐天皇の一綸旨」（中村直勝、歷史と地理）は、並びに寒川辰清が近江輿地志略を編輯するに當つて、先づ其地の有識者に照會狀を出して不審の箇條を質問し、其返書に不審あらば更に實地に臨檢して記述の正確を期した苦心を物語つた「寒川辰清と近江輿地志略」（小島捨市、近江と人）は何れも此の項目中に合叙さるべきであらう。而して史料の事を記して茲に再び私かに過去を顧みるとき、此年程痛ましき思出の種の年はなからう。多くの貴重なる史料は一朝にして烏有に歸しまた再び披見する事は夢想だにする事が出來なくなつたのであつて、幾何の史料が失はれたか、それさへも不明であるが「東京帝國大學圖書館の思出」（三浦周行、表現）として燒失史料を惜まれた中に蔭涼軒日錄六十三冊鹿苑日錄百十四冊の罹災を傷まれたのは、失はれた史料に逸早く手向けられた涙の手向であつた。而してその大災害のために出版界が受けた痛手また非常に深大なもので、ために出版物は微々なものしかなかつた。就中續群書類從完成會が組織されて續群書類從の刊

行を始めた事と古典保存會が古典を寫眞版に附して頒布した事とは兩者ともに大震災のために一時一頓挫を來したけれども、特記すべき事象であり、「八阪神社記錄」が祇園執行日記及び八阪神社文書等の記錄文書を併收して刊行された事亦大なる收獲であらねばならない。「史料綜覽」第一卷が發行された事と共に斯界を益する事大なるは言を俟たない。史料編纂掛からは「大日本古文書」は「毛利家文書之三」を出し「大日本史料」は第一編之二、第五編之二、三、第六編之廿、第八編之九、第十二編之廿四を印行した。〔中村直〕

朝鮮史　從來久しく傳統に浸つてゐた斯界の澱みから、昨年に至つて始めて浮び出したものに清新な蕾と花との二事業がある。その蕾とも見るべきは、朝鮮總督府が內鮮兩方面より學者を簡拔して朝鮮史編纂委員會を組織し、昨年度から實行に取掛つた朝鮮史編纂事業これである。この「朝鮮修史事業に就いて」(稻葉岩吉、植民)は兎もすれば抱かれ易いその曲筆や抹殺が、事業の內情を知らぬ人々の杞憂に過ぎないことを辯明し、併せて廣汎

な史料の探訪に虛心怛懷な援助を期待したものである。かくてこそこの蕾も內外人を喜ばすに足る他日の花を豫期されよう。最早や花として咲き出でたといふべきは、朝鮮史の研究と普及とを所期する朝鮮史學會が、その事業として發行してゐる「朝鮮史講座」である。第十二冊を以て完了すべき本講義錄は、年內に全體の三分の一を發行してまだ滿開には至らないにもせよ、既に開き初めたといふ點に於いて、斯界の昨年に光彩を添へてゐることは確かである。專門的な朝鮮史編纂と、通俗的な朝鮮史普及と大小公私の差こそあれ、かうした總合的一般的な斯界の事業がその蕾と花とを一時に齎らした昨年は、他にも幾多部分的特殊的な方面で注意を惹くに足るべき收獲がないではなかつた。朝鮮史の舞臺が半島であるといふ所から、地的環境の支配を受けて、斯界に活躍する重な民族は、その半島の垂れ下つて來た大陸と、それが割込んでゐる海洋との、さうした兩方面に住まふ諸民族との間に、隨分古くから淺からぬ交涉をば持つてゐた。「有史前に於ける朝鮮と周圍の關係」(鳥居龍藏、朝鮮)と、

「考古學上より見たる上代日鮮の關係」(梅原末治、同誌)とは、共に主として考古學の立場から、記錄なき太古の闇に葬られた、これら他民族との交渉に、一縷の光明をば附與せむとする、努力の片影と認めてよからう。考古學の他に土俗學や言語學の見地から、新しい試みをしたものには「三韓考」(坪井九馬三、史學雜誌)の一篇がある。五世紀のまつ方まで半島の東南隅なる弁辰の地に、いみじくも湛へられてゐたと思はれるマラヨ・ポリネシア系の豐かな匂を、半島の古代史界に嗅ぎ入れようとする所に、この一篇の掬するに堪へない新趣が漂ふ。「古代に於ける內鮮交通傳說について」(小田省吾、朝鮮)は素朴な民間に流れてゐた、かうした口碑の背景として、上つ代の日鮮關係を想ひ浮ばせずにはゐられない。上古に於ける半島と接壤大陸との交通關係は、「古代朝鮮と支那との交通」(稻葉岩吉、同誌)の中に說かれてゐる。時代が下つて新羅一統の時代を過ぎ、高麗朝の初期に入つて建立せられた「新羅興寧寺澄曉大師塔碑の撰者に就て」(菅野銀八、同誌)は、何人も碑面を一見して指摘することができるその矛盾を崔仁滾が崔彥撝の初名であると解することによつて一掃されるであらうと說いたものである。記錄のみによつては解決されなかつた幾多學界の懸案が、古蹟調査の結果決定されたものゝ中で、「咸鏡方面に於ける漢時代並高麗時代の遺跡」(池內宏、朝鮮)の如きはその最たるものである。朝鮮固有の如きものでもその起源を尋ねると、古く支那から渡來したもので、この時代に完成された院館の設備が、行旅に惱む游子のため貴い文化的社會的事業の一端であつたことは、「朝鮮の院館に就いて」(加藤覓峰、同誌)、物された一篇を讀めばよい。今も各道に何院とか何々院とかの地名の存するは多くはその名殘である。これらの驛院の名稱及び各驛院間の里程を列記してあるため、考證考査に便があるのは「朝鮮の道路網及び驛路施設の史徵」(渡邊彰、同誌)である。この時代を通じて社會に存した階級制度を窺はうとするには、「朝鮮奴隸史」田中忠夫、東洋)を見る必要がある。頗る古くから存した朝鮮の奴隸の起源を考へ、歷朝の奴隸史を跡づけむとして、高麗朝の太祖時代から順

次に恭讓王時代に說き及んでゐる。この朝の間佛敎文化の傳ふべきものがある。この時代に大藏經が大陸より半島に傳はり、それが半島に於いて彫造印成せられた事實があり、且つそれに關して種々の疑問も浮んで來るが、それらの事實を明らかにし、それらの疑問を解決せむとするものに「高麗朝の大藏經」(池內宏、東洋學報)があるこの朝の寺院で今日殘つてゐるものは三つ知られてゐる浮石寺の無量壽殿と祖師堂、及び釋王寺の應眞殿これである。後の二者は高麗朝末期のもので、前の一者はそれより更に古いといふ。いづれも「朝鮮最古の木造建築」(開野貞、朝鮮)と稱してよい。李朝になつてその初世(1416—1443)に、鴨綠江上流方面に於ける國彊開拓の結果北方の野人なる女眞人との關係から、この地方に設置せられた閭延、慈城、茂昌、虞芮の四郡に就いて、設置當時の郡治の位置や彊域など、地理的考證を試みたものに「朝鮮廢四郡考」(瀨野辰熊、東洋學報)がある。序ながら世宗の二十五年(1443)に湧き出した「天然炭酸水に名を得た椒井里」(松田甲、朝鮮)のあることを附け加へて置

がう。李朝の中期以後に起つた黨派に就いては、その起つた原因や黨爭の經過や、乃至はその政治上社會上に及ぼしたる影響、並びに各黨派の特色、地方的區別など、その梗概を叙したものに「李朝黨爭概要」(小田省吾、同誌)がある。傳記に關したものとしては「百の字を名又は號とする李朝の人物」(松田學鶴、同誌)を數へねばなるまい。この朝の制度に關しては、高麗朝軍資寺の例に倣うて李太祖元年(1392)に瑞設せられ、李太王廿一年(1894)に廢止せられた「舊軍資監の行事に關する調査摘要」(渡邊彰、同誌)がある。またこの時代の「交通に關する沿革」(土木課、同誌)や「交通系統の變遷、附交通に關する古來の傳說」、同誌は、李太王廿一年郵便制度が設けられてから今日に至る「朝鮮通信制度沿革の一部」(渡邊彰同誌)と共に、交通史上の參考とならう。近世東漸して來た西洋の勢力と文化とが、最近世になつて微かながらにもこの半島に押し寄せて來た。勢力を基とする外交史の方面では、米國の記錄から摘譯されたものに「朝鮮と米國との條約締結始末」(三好重彥、同誌)がある。更に

文化の調をなす宗教史に關しては「在鮮外國宣教團布教一斑」（吉川文太郎、同誌）を見るべきであらう。こは現に一昨年度京城で開催された聯合宗教會議の報告書中から譯載されたものである。基督教の一分派に「朝鮮に於けるセヴンスデー・アドヴェンチスト」（同人、同誌）がある。一九〇四年以來年々十萬圓以上の傳道費を米國から送つて來て、朝鮮に神の國を建設しようと努めてゐる。今ではその印刷所、病院、學校等の施設も漸次具備して來た。朝鮮に於ける西教の勢力はこれらの數篇でもその一斑を推すに足りよう。最近露國動亂の影響が半島の東岸にも及んで、「元山に於けるロシア村」（一旅行者、同誌）の如き一時九千人以上の露國避難民を收容したといふ。溯つて朝鮮文化の淵源を考證したものに「朝鮮神教源流考」（李能和、史林）がある。本年は前年の檀君神教の教を承けて濊貉、三韓、夫餘、高勾麗、駕洛、百濟、新羅、高麗などの歷代神教に說き及び、いづれもその源流が箕子傳說に發せずして檀君傳說に基くといふ考から多く古語を引いて解釋を試みたものである。その中には濊貉與羲和考及び「字與倭字考の二疑案を揭げてゐる。民族自決に發したかゝる檀君崇拜の熱は、傳來の箕子崇拜といふ附屑傳說の殼を燒いて、今や全鮮の空氣を朕せむとしてゐる。けれどもこれは近年の傾向であつて、久しき間箕子傳說は半島に於ける儒教の發達に伴ひ頗る發展して來たものである。高麗朝に端を被し李朝盛世に絕頂に導かれた「朝鮮に於ける儒教」（高橋亨、斯文）は、朱子學で一貫せる單調な裡に、國家社會を儒教化した點と宗教的であるといふ點と、この二點に特色を有つてゐるのであるが、現今では殆ど何等の勢力がない。これを救濟するの途は、只洋學をやつた我が漢學者の力に俟つべきのみと論じてゐるのに對し、半島の儒學は王室や兩班の特權擁護の護符の如く利用されたもので、固より日本のそれとは同日の談でない。半島では既に着古され、當然脫ぎ捨てらるべき運命にあるその古衣を拾ひ上げて、再び朝鮮人に着せようとすることは決して策の得たものでないとて、再び「朝鮮文化問題」（稻葉岩吉、東亞經濟研究）に於いて、傳說及び思想の解放を論じたものがあ

る。たゞひこれらの趨勢がどうであらうと、それ自身特殊の意味を持つた「朝鮮に於ける儒教と經學院の任務」（金完鎭、斯文）とは、決して忘れ去らるべきものでないさりながら今や半島では警戒すべき地下水的思想及び運動がないではない。そのこれを檢出し說明せむとするものに「朝鮮に於ける文化政治と思想問題」（高橋亨、太陽）がある。かの難解なる朝鮮の古史古書、詩歌小說、傳奇野談を平明流暢な言文一致に記述し、朝鮮文庫、鮮滿叢書として刊行せられた四十二書中から、特に傑出した名篇十二を選擇して「朝鮮文學傑作集」（東京自由討究社）が生れた。年內には全體の四分の一だけ發行した筈である儒者に緣があるといふ點で、こゝに「朝鮮鴻儒宋時烈の遺蹟華陽洞」（松田甲、朝鮮）のあることを附言する。また儒教が國家社會に影響したといふことに因んで、國家社會の法制制度に關する二三を列記して置かう。それは「朝鮮文化の研究」第一冊として「朝鮮の姓の由來」（稻葉岩吉）が出版されたこと、法制史の權威として「朝鮮法制史稿」（淺見倫太郎）が公刊されたこと、及び古來部落の間に同志契合して相互扶助の精神に基き組織された一種の團體である「契に關する調査」（李覺鐘、朝鮮）のあることこれである。佛教に關して日鮮關係を取扱つたものに「佛教史上より見たる日鮮の關係」（手島文倉、宗教研究）の續稿があり、經疏に就いては「高麗朝の大藏經」（前出）の外「新たに發見せられた涅槃經の疏」（池內宏、朝鮮）が再び半島の學界に披露せられ、「義天續藏の日本渡來につきて」（大屋德城、同誌）も亦この涅槃經疏に言及してゐるのである。若し夫れ藝術に關するものに至つては、音樂の方面で「朝鮮の樂曲並樂器の沿革」（同誌）に併せて雅樂隊の沿革や樂師長明完璧氏の傳を載せたものがあり、書道研究の上で殊に有名な「百濟扶餘隆の墓誌に就て」（葛城末治、同誌）述べたものがあるかを思へば朝鮮庭園の發達史を物語る一資料を暗示した「朝鮮の庭園」（田村剛、庭園）もある。或は「朝鮮陶磁器に就て」（奥田誠一、國華）、又は「新羅三寶の一たる火珠並鏡玉の發達に就て」（大原利武、朝鮮）記載してゐるものもあれば、その他紀行では前年に續いて「慶州の二日」（小田

幹治郎、同誌）があり、土俗の方面では「濟州島及鬱陵島民謠調査に就て」（石川義一、同誌）がある。かくの如く多かれ少かれ斯界に貢獻する點がないでもないといふことで枚擧するなら、恐らく文字通り遑のないことであるかも知れない。況んや昨年を青史に織り込んだかの大震災と大火災とが生んだ不祥なる「朝鮮人問題を國民的教養」（澤柳政太郎、地方行政）の如き紛々たる時事の論講を擧げ來るに於いてをやである。これを要するに昨一年の間に、斯界の海へ流れ込んだものは、古くは滿洲を含めた支那系の流と、南洋を罩めた日本系の流と、さうした兩要素の合流で色づけられながら固有な朝鮮風の流とであつて、そこへ新しく注ぎ込んだ西洋系の流をも交へて、深淺廣狹の別はあつても、前年よりは一段と斯界の水準を高めて來たことは事實である。斯界の昨年を凝視してゐる間に、私共はいつしか前に展開された洋々たる本年の斯界をば迎へてゐるのである。〔杉本〕

東洋史　東洋文化の英華は支那に於て榮えた。其の支那と輔車の關係を有せる我が國が、日支親善の爲に對支文化事業を企圖するや、一般邦人の支那に對する注意は例年になく朝野に強く、「支那文化事業に對する基礎智識」（後藤朝太郎、外交時報）を固めむ爲、支那に於ては人民が勝手に自衛し、國家としての本質空虛にして自然今回の企に對しても地方的に利害關係を異にすれば、永久的に支那一般に好感を與へ將來の日支親善に效果あらしむるは東洋圖書館東洋博物館を創立して支那文化の精髄を保たし、併せて東洋研究所を開いて純學術的に支那文化を研究する事業を立つるが最も機宜に適したる事と高唱するあり、「對支文化事業に就て」（山口昇、同誌）日支兩國間の感情の惡化は主として支那學生の日本を理解せざるに起因すれば、日支兩國人の相互的理解が急務にして、北京大學其他高等專門學校に日本文學科を設けしめ、さしあたり日本人講師を派して教授せしむると共に我が新進の學者をして支那に派遣して學術的發表を爲さしめる一方、留日支那學生を優遇奬勵し、更に支那婦人をしても日本を理解せしむるを得策とする議を出だすもあり。支那に在りても亦青年學者は西洋文化の缺陷ある

に心附き、支那古文化の研究に目覺め、北京大學より國學季刊三冊、東南大學南京高等師範學校より國學叢刊三冊の發刊ありて學者の新研究を滿載し、章炳麟を中心として華國月刊の生るゝあり。之に加ふるに佛國の東洋學者シルヴンレヴィ教授遠く東洋に渡來して其の研究を講ずるなど昨年の斯學界は種々の原因よりして甚だしき活氣を呈した。則ち時事問題に於て見るに一般的論著の雄なるものとして「現代支那研究」(矢野仁一、單行本)を擧げなければならぬ。之は嘗て新聞雜誌に公表したる上數篇の新作を加へ門戸開放主義から特殊利益擁棄までの諸問題に就きて近代國際外交史上に於ける門戸開放、米國の門戸開放政策提議の動機、門戸開放の語の不適當、米國の支那領土保全の通牒と門戸開放、露西亞の滿洲に於ける侵略態度、日英同盟條約と門戸開放、門戸開放及び特種利益に對する米國の態度、日本の滿洲に於ける特種利益と其の正當及び限界、ハリマンの南滿鐵道讓受計畫等十六項に亙り、支那の關稅改訂問題研究に就きて支那關稅史上從價五分協定稅率起原、各國條約に於ける十年改訂期限の區々と其の效果、以下十項、三國干涉から露西亞の旅大租借までに就きて七項、再び三國干涉から露西亞の旅大租借までに就き六項、露支外交關係の過去及び現在に就き四項、松花江の航行權に就いて二項、並に蒙古問題二十項、西藏問題六項の論文を揚げ現代支那問題を云爲せむとする者の必ず一讀すべきものである。又た「支那の財政窮迫と裁兵問題」(吉田虎雄、東亞經濟研究)「支那の財界と中央財政」(長岡克曉、同誌)の如き、前者は一昨年外交部太平洋善後委員會に於て裁兵に關する審議を發け辦法大綱十八條を議定せしもその實行に成算なき事情を指摘し、後者は收入支出の調節手數が急務にして刻下の難問題たる一般支那財界の實況より中央財政が關稅と內債の信用との點にて一般財界に大關係を有するに係らず紊亂極に達せることを說いて居る。從來の日本の「支那の產業に對する投資」(戶田海市、經濟論叢)が政治的勢力を先行せしめたるは其の失敗せし所以なれば、資本主義を以て國際的發展を爲さむとする米國にも學ばず、專ら支那人の利益と感情とを尊重したる方法を選ぶ

べきが得策なるも合辨法亦必しも成功せざるべきを警告せしあり、世界的大勢は「最近の支那勞働者階級」（澤村幸夫、東洋經濟研究）にも覺醒を促がし、一般生活程度の向上、集團的勢力の增加、解放と改造の民衆運動、歐洲大戰に赴きし十五萬の苦力の見聞、等に基き爭議を釀生しつゝある。「東三省に於ける防穀令に就て」（松田琢海、同誌）「滿蒙開發策更新の機會」（石山福治、國學院雜誌）亦傾聽に値すべく、殊に後者は朝鮮統治の對助として滿蒙開發の急務なるを說き、偶、震災の爲世界の同情我邦に集まり人類相愛の叫高く、災餘の人を滿蒙に送りて開發に從事せしむるの好機運の到來したることを謂つて居る。「見聞漫錄」（曇隱、支那學）と題して民國二年に注音字母を製し同九年全國小學が國文の稱を改めて國語とせし經緯、支那上下今や國字問題に踏込める事を論ぜるもある。總括的論說とも目すべき「佛教文明と東亞の人文」（シルヴン、レヴィ、龍谷大學論叢）は佛教研究に當り者那教研究の必要なるを指摘し、阿育王時代の佛教の外國宣傳によりて希臘精神との接觸生じ、又安息國の下に於けるイラン精神が印度佛教を新にせむとし、林邑地方は更なり第十一世紀頃全地國邊は學術の威光を保持し、佛教文明が種々異なれる人種言語國民の間に交りて如何に其の特徵を開展せしかを論じ、「滿蒙社會史觀」（稻葉君山、太陽）は滿蒙の社會未だ安定的ならず、朝鮮のそれは不動的固定的なれば、在鮮內地人は進んで滿蒙シベリアの事情を研究了解するの努力を拂ふ必要あるを警告せる好文字である。又た南方佛教は寧波の諦閑和尙、中部は武昌の太虛和尙を中心として活氣を呈し、在俗の人士亦頓に佛教信仰の熱昂く溫洲の吳摯華居士の如き一生を佛教に捧ぐる者あることを說ける「支那佛教現勢一班」（稻葉圓成、禪宗）觀もある。民族性問題に關して「支那の國民性」（柏田忠一、東方時論）を概觀して心理的矛盾、陰陽と迷信、個人の特質を論じ、民族的特性として生れ乍らの外交家、易卜迷信、乞食の風習、秘密結社の各項に分類して詳說せるは、支那の政情が軍閥と野心政客との權力爭のみにして一般民衆生活は政治と無關係に營まれ、一方革新運動は世界思潮に根據を有する民衆

の自覺に起り將來の支那は必ずや地方分權的政治組織とならむと謂ふ「支那民衆と將來の政治」(神戸正雄、同誌)を歴史的に卜せる、並に日本人の有する支那に關する智識と支那人の日本に對する智識とを比較し支那人が傳統的に對手者の心裏を觀破する鋭敏を有し、其の國情が我と天淵の差あるを「日支兩民族の相互研究」(石山生、國學院雜誌)に依りて知る必要あるを指摘せるこ、併せ讀むべきである。若しそれ政治經濟方面に至つては。「近代支那論」(矢野仁一、單行本)は既往新聞雜誌に公にせる編著を集め、支那無國境論、支那は國に非る論、支那の社會主義思想、及び社會革命、支那の國家及び社會、日支兩國を國際眼に觀て、滿蒙藏は支那本來の領土に非る論、支那帝國と支那共和國、清朝の滅亡を論ず、國家の責任感なく言論の責任なき支那、支那問題の要諦を論ず遼東回收論の論理、廿一個條協約の無效を主張する支那人の心理、支那の開國に就いて、支那の上司に就いて、近代支那の領土及び文化に就て、支那浪人論支那國際管理說、支那の國際管理と列國の特權拋棄、華府會議の齎

せる支那の利益と不利益、米國と支那と日本、米支關係概說、支那に於ける西洋學の諸篇を收めて歴史的立脚地より縱橫の論難を爲して居る。「支那の政治と社會」(鷲尾正五郎、太陽)「支那社會の本質及び作用」(稻葉君山、東亞經濟研究)と亦其の概論的論文にして、殊に後者は一昨年來の後を受けて支那の社會は古來獨裁政治の發達せし爲、政治を置去にして發達せしものにして、官吏の回避の如きは人をして政治に對し忌避心を抱かしめ、榮辱は國家を離れ、學問が官學より離れ、以て私學の盛となりし事情を闡明ならしめてある。「支那の社會改造論」(雲奇生、太陽)は夫婦共產問題、歌舞音曲の改造、感化院增設の急務、貧慾の節制、結婚禮の改良等に就き、歴史的批判を加へ、「支那の組合制度を論ず」(木村增太郎、東亞經濟研究)るや、其の起原を漢唐に擬し、現代の會館公所の實情が嚴然たる一個獨立の社會團體にして經濟組織の核心をなし何等國家政府に關係なく自主自發の發達をなして社會の中堅を爲せるを說き、「民國の鹽政」(同人、同誌)を說くや、民國十年斯道の造詣深きテーン氏

を顧問に聘用して改革を加へし現行鹽政の大要を述べて居る。試に時代的に斯の方面の研究を大觀すれば「法家と儒家との關係」(本田成之、支那學)を論じて法儒兩家の別は絶對的のものならずして一體の兩面であり、兩者は相抱合して初めて效力を發すべきものにして所謂家族制度より來る道德も所詮は政治上の必要より來由し、法家的考を充分に發達せしめたる窮極は竟に儒家の禮樂的德治に進むものなるを謂へるあり、「荀子之政治論」(吳虞、支那學)を解剖し荀子は尙古の風を排斥し現世を以て政治主義の標準とするも、君主々義を主張する爲、君主の道德に就ては嚴格を要求し、土地人民統治權の三者を以て國家を構成するを本とし禮刑並用を說くと謂ふあり、「唐時代の社會史的考察」(玉井是博、史學雜誌)を試みて土地公有制度の崩頽と兵亂天災の爲とに依り起りし流民問題が貴人富豪の土地併兼と相作用して國家の收入を減少し、地方豪族の勢力を養成したりしかば、玄宗時代より恩情政策を棄てゝ積極的に流民の根絶を計り、漸くにして恩情政策に復歸し、本籍地への復歸と寄留地への編附との二策を以て流民を處置せしことより、上流社會は莊園、礦磁、店舗、車坊、園林を以て收入多く、寺觀に假託虛誕なる佛敎攻擊起り或は不拜父母主義を唱ふる者あり、盈滿の誡さへ起りしことを詳說せるあり。京本通俗小說中の一篇拗相公に「王安石の保甲法」(松井等東亞經濟研究)に對する苦情の見ゆることより說起し、此法が新法中隨一の重要案件たりしは對契丹事情より考察して初めて會得し得らるべく、北宋時代に似たる我國現代人の三顧に値すべきことなるを謂へるがある。元志には元律の全文存せず、別に元典章と至元條格ありとて元典章の詳細を縷述し元代に於ける四種本の祕閣に藏せられ乙種本の流布せられたるを謂へるは「元の經世大典並に元律」(淺見倫太郎、法學協會雜誌)の解說てあり、明代南人官北、北人官南の制は明史稿選舉志に見ゆるも之が必しも實行せられざりしならむことは御批通鑑輯覽の記載と矛盾あるより推察し得られ、然ればこて全國を三部に分ちて廻避策を用ひしことも勿論確實ならざることを證明せるは「明代の地域廻避についたて」(清水泰次、

東洋學報）の研究である。「乾隆帝と社會政策」（東川德治、法學志林）は帝が陸會禹の救饑譜を採め得て之を愛し翰林院に敕して對抗せしめ康濟錄と命名して社會政策の準則とし、其の先事、臨事、事後の三款を實際政治に應用實行するに努めしを説ひ、「清朝文官の任用について」（清水泰次、國家學會雜誌）知事の本籍廻避の沿革を探り、清朝文之に法り官吏は親族と同一の官職に在るを許さず、師弟の廻避すら起され王心敬が十五省を南北中の三部に分ちて一部一部の範圍にて廻避せしむるの議を提出したるを指摘して居る。光緒廿四年康有爲の上奏に發端せし政府保守派と新思想派との葛藤なる「戊戌の變法及び政變」（矢野仁一、史林）に就き、西太后が初より必しも變法に絶對的反對を表せず、而して此の變法の目的は根本的制度改革にも非ず、彼の言路洞開の如きは之實行する上に於ての已を得ざるの手段にして、同年七月頃には早くも變法に反對する氣運の北京政界に兆せることを極めて詳細に洞察説述せる、「滿蒙問題」（作田莊一、東亞經濟研究）につき大正四年日支條約中滿蒙に關する條項破棄論が支那に高調せられ、支那が日本の經濟的地位を固むる爲に支那の富源を開發し日本に分配する能はずと主張せるは世界の富源を世界の勞働者の前に開放するを第一歩とする世界經濟の進歩論に背馳することを廢せる、同じく「遼東回收論の論理」（矢野仁一、外交時報）を考察して支那が强制無效説の主張し難く、又た主張しても利益無く尚ほ且つ列國の承認を得難き見極を附し、圖を改めて國會不同意無效説を主張するに至りし心裏を觀破せる、「蒙古の獨立及び獨立後の露支關係」（同人、同誌）を概觀して露蒙協約迄の露支交渉、及び露支蒙三國關係を説けるなど、支那の政治經濟外交上の問題に觸れ之に歴史的批判を加へたる論著は決して尠少ではない。之を時代を古くしては「詩を通して觀たる周代の經濟狀態」（小島祐馬、支那學）の如き西周より春秋時代の間に於ける一般支那人の生産業としては農業が其の主要なるものにして養蠶業も亦一個の主要生産業と目すべき實情に在るを察知するに難くなく、當時に於ける農夫の耕作法は耦耕が一般風習にして土地均分のこと未だ行

はれざるを注意し、「支那古代に於ける都市の起原を論ず」（那波利貞、東亞經濟研究）にや都市と村落との區別標準は國の異なり時代の異なるに隨ひて異なるべきを論じ、支那に於ては殷以前に都市存在無きことを論證し、支那の都市としては人家稠密、位置の永續性强固、宗教的又は政治的に住民結合し、城廓の存在の必要なる四條件をあげ、國邑の字義の解釋より周の豐邑が支那古代都市の起源ならむかと謂ふ。「短陌に就て」（田中忠夫、同誌）之が梁代に起源し唐宋元明清と行はれし沿革を調査し、これ皆政府が財政補助の爲、支出を減じ、大小官私各種の銅錢を兼用し金融業者が營利の爲支出を減ぜむとするに起因するを說ける、「支那の銅禁に就て」（同人、東洋）銅錢鑄造材料の獲得、銅錢私銷の防止の爲、南北朝以來清朝迄行はれし經緯と清の高宗の戶部尙書海朝の之に對する意見を批判したる、「明初の土地問題」（清水泰次東亞經濟研究）として方孝孺の井田論、解縉の井田均田併用論の得失より太祖の民衆保護策、土地兼併排斥策、富豪抑制策を議論せる、何れも可讀の論著と謂ふべきである。更に思想宗教問題に轉目すると道教と老子とに關するもの例に依りて多く、「老子の學說に就て」（楠本正繼、哲學雜誌）其の道の性質が規範なると共に實在なることを斷定し、實在の道は儒教特に朱子の所以然に當り規範の道は所當然に當ることを論ぜる、「老子の哲學と現代文化」（井上哲次郎、丁酉倫理會倫理講演集）とを比較研究して、哲學倫理政治兵法に分類して論じ、「道教と神仙不死」（宇野哲人、東洋）は靜坐法、呼吸法、吐納導引法、服食法、藥餌法、房中術、積善立功の概要を說き、「朱子の仁說に就きて」（山口察常、東洋哲學）愛之理仁之德說が彼の創見に出づるや佛者の說を襲へるやを吟味し龍龕手鑑に於ける仁字の有無を論じて山崎美成の佛說襲用說を難ぜるは、宋の眞宗仁宗の朝、胡安定、孫泰山、徐仲車、石守道諸輩が宋代理學の先驅を爲し二程に至りて完成したる經路を叙せる「宋朝義理學の前驅後援」（內田周平、同誌）と共に併せ見なければならず、土地臣民君主並に其の相互關係に關する思想と易姓革命を是認する思想とにつき、前者は君主の地位を左右する者の民衆

なる爲、絶對自由の國となり、天下の意味も領土の意に非ず自然孔子に早く革命思想ありしことを謂へる「儒教の內面的思想」（湯淺廉孫、支那學）も亦興味がある一研究である。「蒙古喇嘛教の大綱」（惠谷隆海、摩訶衍）は活佛は轉生し、其の宇宙觀は須彌山說成住壞空四劫說を立て六取生死輪廻說、十二因緣說を主張し、涅槃に歸入するを以て目的とし、獰猛神、和合神、惡魔退治神等を尊ぶものであり、「宋子の學」（浦川源吾、哲學研究）は孟子と時を同じくする宋牼卽ち宋鈃其人の學說にして、其の著は後漢迄存在したるらしく專ら寡慾を主張したるは其の說の傳承を短かからしめたる所以ならむかを謂つて居る。尙ほ「支那哲學研究書目錄」（足利衍述、東洋哲學）なる便利なる書目も發表せられた。佛教問題に關しては先づ「釋尊の出現と其本懷」（高楠順次郎、禪宗）がある。之は印度の哲學と宗教との不可分離なることを說き、精神界の最高潮に達せし時佛陀の出でて無神無我說を唱へしは、古來山林に在りし中道實相の理想を人間社會へ出だし爲に印度の藝術哲學に燦然たる光輝を發せしめたるもの

のなるを謂つて居るのである。「佛陀と摩訶毘羅」（羽溪了諦、哲學研究）は紀元前六世紀摩訶陀の王舍城、拘薩羅の舍衞城、跋耆の吠舍釐、嗟彌の憍賞彌が非娑羅門主義に立脚せる新文化運動の中心地となり、尼乾子若提子卽ち摩訶毘羅が佛陀より十年遲れて傳道を始め、其の三十年間の活動は阿婆耶、バッター女、ナンヅッタラー、アッジュナ、ミガーラ、サッチャカ等の有力者を之に歸依せしめたが、其の成功の原因は彼が利帝利族出身にして新興國の諸王と血族關係を有し且つ宗教運動に對する準備の充分なりし爲にして、實に釋尊と共に當時の教界に於ける二大明星であり、兩聖滿を持して放たざりし事情を論證して居る。「緊那羅考」（松本文三郎、密宗學報）は天龍八部の一なる Kimnara は所謂眞那羅とは全然別個の神にして、希臘埃及に信仰の淵源を有するものにして、雪山地方の鳴禽崇拜に起る天の歌神なるを論じ「佛教の佛陀と基督教の神」（島地大等、丁酉倫理會倫理講演集）は佛教は汎神論基督教は一神論に立脚し、前者は特に神の超越性を强調せるに後者は更に內在性をも强調せ

ることを比較研究してある。西域僧に康姓を名乘る者多きはこれ康居國に佛教の弘通したる傍證とするに足るべく、其後突厥の點棘連可汗が唐の開元年中佛老廟を起さむとしたる所傳あり、敦煌發見品に回鶻文佛典の存在する以上は宋代回鶻にも斯教の行はれたることを察するに足るべく「トルコ族と佛教」(羽田亨、宗教研究)この關係更に將來の研究を必要とすべく、「喇嘛教に於ける阿彌陀佛觀」(田中順道、摩訶衍)は佛身は報身、淨土は報土觀にして、「佛妃耶輸陀羅を中心として」(峽史學人、同誌)其の操行上懸疑あるは姫の歴史が佛教女性史の根本要訣問題となり、「支那佛教史上に於ける友遁の地位」(高雄義堅、支那學)は鳩摩羅什入國以前に於て釋道安と共に無着世親系の高遠なる哲學を咀嚼するだけの準備を爲し、彼の中心思想が般若空義に存し佛教宣布の聖業に大功蹟ある點にて賞賛に値し、則ち「鳩摩羅什の飜經事業に就いて」(潮晉眞澄、東洋哲學)見ても秦王姚興の保護彼の人格學識、地位の優超の上に道安、惠遠の譯經事業が直接間接に與りて力ありしものにして、飜せし原本は恐くば惠遠の門人支法領の將來せしものなりしと思はる。「支那佛教對外問題の關鍵」(山内晋卿、龍谷大學論叢)は弘明集後序の内容を批評して其の世界說を解釋し清朝に於ける淨土教家として支那淨土史上の最後を飾る「彭紹升の念佛に就て」(大原性實、同誌)聖淨融會的研究態度を以て法性を說明するに諸法不二一體の有の立場より觀察し、經宗論に於ては空の立場より否定的名辭を用ひ、淨土に對しては已心淨土、穢土、娑婆卽寂光土淨土遍法界說を主張し唯心の如來を高調したるを指摘せる、釋迦牟尼如來像法滅盡記の譯者「法成について」(石濱純太郎、支那學)其の傳記　譯著六篇に關する知見を叙せる「祕鍵に譯された般若心經に就て」(下浦禪城、密宗學報)と題するものと共に斯方面研究者の看過すべからざるものである。印度問題として亦相當の論著が發表せられた。就中「印度の古曆と吠陀成立の年代」(飯島忠夫、東洋學報)は甚だ興味ある大作にして、吠陀曆、吠陀以後曆、西紀四五世紀以後曆の三時期に分ち、第一期第二期間の年代上の限界は不明確なるも、第三期曆法の特徴は

Kali yuga 紀元、二十七宿配置、木星紀年法の三點にて前二期と趣を異にし、西洋智識の印度流傳を物語り、二十七宿の成立が西紀前四百年時代なるより見れば、梨俱吠陀の成立は其の天文曆法的內容より見て第二期曆に共通するを以て西倚前三世紀頃とすべきを論じて居る。龍樹の出世年代と案度羅朝」（高桑駒吉、東洋哲學）は其の親密關係ありし婆多婆訶王の時代より推論し遺物の刻文より案度羅朝時代の印度文化を論じ、「印度のカスト制度」（大野恭平、東洋）は西紀前一千年頃より四種姓として現はれ、一方外敵に對して印度文明を保護すると共に他方內部よりの崩壞も久しく阻止し得たのである。其の他アーリヤ民族の印度移住より西歐文明接觸時代迄八期に分ちて概論したる「印度文明史總論」（大川周明、同誌）竹の構造より發生して一定の樣式一貫の主義を以て佛教建築となり石柱、塔、門、舍利殿、精舍建築の全盛を誇りし「印度の建築」（伊東忠太、同誌）、梵劇の起原たる宗教的舞踊のヌリック、ヌリチヤ、ナーチヤの由來より佛教が教理宣傳の爲演劇を利用するに至る迄の「印度の宗教と演

劇との關係」（武田豐四郎、同誌）を述べたる、ヒンヅー、タントラ、梵教會、聖教會、シーク、ジャイナ、波斯教回々教につき淵源現狀を叙せる「印度の宗教」（山上天川同誌）、釋迦佛及び佛教の舊蹟二十餘所を列擧說明したる「印度の佛蹟」（來島琢道、同誌）皆參攷に値する。藝術方面に於て先づ彫刻にては「アジャンター石窟寺の彫刻的文樣に就て」（澤村專太郎、國華）第廿番より第廿六番に至る諸洞のそれが彫刻主義となれることを論ぜるあり、「五臺山大佛光寺の古佛像に就て」（小野玄妙、東洋哲學）之が唐の大曆年間の作として敦煌千佛洞のそれと共通點あるを謂へるあり。其の第二十二窟より第二十四窟に互る諸窟と東方四窟の彫刻につき解說を加へ　前交通總長葉恭綽、現山西督軍閻錫山が保護策を講じつゝある實況を叙する「山西省大同府雲崗石窟の解說」（小村俊夫、東亞經濟研究）は、「大同石佛寺に就て」（南部修太郎、學藝）の一篇と併せ讀むべきである。繪畫には「佛國にて見た敦煌の佛畫」（島華水、歷史と地理）と題し巴里の東洋博物館所藏の地藏菩薩像、阿彌陀像、水月白衣兩觀音像、

釋迦成道圖一覽の記を提出せるは、「敦煌出樹下說法圖に就いて」(田中一松、國華)法隆寺の壁畫と比較し、描法の寫實的なる、衣紋の施設形、式褶の描法上中唐以後の作品と觀、以て印度西域的感化の大なるを認め、印度西域藝術と唐朝藝術と法隆寺壁畫との三者の關係あるを論じたる、「唐畫樹下說法圖の解」(瀧精一、同誌)として之が如來を中心とせる五尊式にて法隆寺壁畫と合致點あるを謂へると相關聯せるものである。後畫錄、續畫品錄、畫學祕訣四書の後世の僞書なることを證明し、貞觀公私畫史、歷代名畫記、唐朝名畫錄を批評的に紹介せる「唐朝に於ける畫論畫史の書」(瀧精一、同誌)も見逃すことが出來ない。音樂には南管御前淸曲中の灘破、石榴花趣賞、白芍葯、越任好、三面金錢經以下輾轉、愁人怨、懇明臺、猴技調、走馬、百鳥歸巢に關する「臺灣音樂考」(田邊尙雄、學藝)、支那の物賣の叫聲に、將た乞食の哀聲にも音樂的旋律あるを指摘せる「支那音樂雜考」(同人同誌)がある。文化史方面の論著には「公羊家の文化階段說」(小島祐馬、哲學研究)につき易姓革命を是認する有三統、文化發展の過程が所傳聞之世、所聞之世、所見之世の三階段に分るゝ張三世、外國に對する思想が三世に應じて異なる異內外の各說を說き、社會は將來に向つて次第に文化の進むものと解せる所以を叙したるあり、「淸代支那の領土及び文化に就いて」(矢野仁一、太陽)支那空前の大領土となり滿蒙西藏新彊方面に迄も支那文化の擴充せし證左を各省の舉人中額蒙古地方に夥多しき支那人町の勃興せし二點より論證したるもある。新唐書突厥傳の胡曾康蘇密、玄宗本紀の康待賓、沙州圖經の康拂耽延等が皆ソグド人にして、支那とソクディアナ地方との關係の審接なるを想はしむれば、「漢北の地と康國人」(羽田亨、支那學)の研究の必要なることを絕叫せる、四川省成都が天然の富力群雄の割據に適したる理由を述べ成都の名の起原と其の意義、漢の文帝時代文翁の美舉、公孫述の大成國、蜀漢の獨立、李雄の成漢國、唐の玄宗僖宗の入蜀、前後蜀の成立を以て漸次支那文化が浸潤すると同時に之が保存にも貢獻せしことを概論せる「文化史上より觀察する四川省成都」(那波利貞、歷史と地理)

の開發事情を叙せるあり。「支那文化の爲めに」（内ケ崎作三郎、東洋）邦人の爲すべき事業を數へたるもある。若しそれ特種問題の研究に於ては先づ「宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚の事蹟」（桑原隲藏、單行本）を擧げなければならぬ。之は支那と亞剌比亞人との貿易交通の事情を攻究し亞剌比亞人蒲壽庚一族が支那に於ての活躍振を最も確實に考覈したるもの、其の夥多しき脚註亦各々各個の獨立せる小論文を爲して政治問題經濟問題に亙り著者が永年入念研究の精華は凝結してカンフー、ジャンフーの歴史地理、一世卅年說、支那銅錢問題、淸眞寺の創建問題、タウガスの解釋、外人の見たる宋代の風俗、菩薩の曲の由來等巨多なる問題に就きて確實なる博引旁證を加へ、妥當なる斷案を下してあるのは近來の意義ある學術的快著と申すべきである。「東夷に就て」（坪井九馬三、學藝）將た「歸化城史」（乘杉義久、東洋）に就いて文獻を探ね實地を踏査し、「支那の呼稱に就て」（片岡孤笻、太陽）支那、震旦、キータイ、中國の語原を詳述せる、「上海論」（柏田忠一、東亞經濟研究）を試みて其の歴史、共同租界、政治機關、軍政、外交、土地制度を論ぜるものを外にして、時代の古き問題より概觀すれば、禮の意義に宗教的、道德的、法律官制的の三段の進化ありて、禮記の性質は前第一第二の兩階段に跨り、幼時男女の取扱に別あるも地位に差なく、居所、行動、使用、器具、物品、交際、往來、思想、言語の有別制限は存するも、古く男女同等の思想ありしことを論ぜる「禮記に表はれたる婦人の地位」（田崎仁義、同誌）、「周禮冬官司工に就て」（同人、同誌）司空司工の音通假借を論じ考工記は官制に非ずして工事教科書なるを謂へる「山東地方の古傳說と我が古代傳說」（那波利貞、中央史壇）とを比較研究し、古代泰山を中心とする島嶼に原住せし人民の子孫が殷周時代徐夷萊夷として殘り、周廷が之を統御するに苦心したる事情より山東固有の天孫傳說、浮橋傳說が我が天孫傳說、冊諸「二尊黃泉傳」と類似するを指摘し、山東地方民の海外移住が此の傳說を我邦に傳播せしに非ざるかを論ぜる、「支那古代の坐法と其の變遷」（池田蘆洲國學院雜誌）を探究し、家屋建築の樣式より唐虞夏殷周

皆坐せしこを證し、安坐、跪坐、跪、跽、蹲踞を說明し、「拜、揖、拱の解」(同人、同誌)說を爲して稽首拜、頓首拜、空首拜、振動拜、吉拜、凶拜、奇拜、褒拜、肅拜を說明せるあり、「條支國考」(藤田豐八、東洋學報)は漢代支那より大秦に渡るに巖賓烏戈山離條支道と安息國都于羅道の二道ありしことを論證し、魏略の所傳に基きて條支于羅異地說を唱へ、「吳の發展と申公巫臣」(浦川源吾、歷史と地理)は壽夢以來の吳の國運發展は淫蕩なる女性夏姬を納れし爲楚を去り晉に仕へし申公巫臣が、楚の大臣より其の宗族を殺戮せられし報仇として楚に隣れる吳を强大ならしめむとして敎導したることを指摘し「榻布攷」(那波利貞、史林)は史記貨殖傳のみに見ゆる榻布が棉布なりや否やの古說に批判を加へ、木棉の歷史、白疊布の解釋に對しヒルト、ロックヒル、ラウファー諸氏の說を考へ、支那に於ける木棉栽培の歷史を探りて、榻布は漢書の答布にして楮栲布なるを證明し、施て我が古言タフの語の秦漢人の楮栲布に對する俗稱の訛傳せしものならむを論じ、「楊雄と法言」(狩野直喜、支那學)は楊雄が王莽の爲劇秦美新の文を撰びしや否やにつき解嘲の序に徵して彼が王莽時代に下位に沈淪し、法言に婉約の言を以て王莽を誹りしことあり、彼は黃老的の思想深く、俗と浮沈する態度あれば賦家あるが故に隱約の文を作りて後人をして其の出處を疑はしむるに至りたるを謂ふ。「抱朴子に見えたる漢末の風俗」(岡崎文夫、同誌)が壞亂甚だしと謂ふ章炳麟の說を批判せる「蠕蠕の國號及可汗號につきて」(藤田豐八、東洋學報)丘豆伐を Küälburi 蕩苦蓋を Ukhagau 牟汗紇升蓋を Mükeige の對音とするなど勅連、處、受羅部眞、伏古敦以下の諸汗の特號を蒙古語と解して初めて意通じ、自然蠕とは蒙古族ならむと謂ひ、唐の杜環の經行記に初見する「支那記錄に見えたるイスラム敎徒の猪肉食用禁制」(桑原隲藏、史林)につき北宋の朱彧の萍洲可談、元の周密の癸辛雜識、皇明實錄野、獲編等に散見する記載に基き之を實證せる「支那史上に於ける華夷問題」(箭內亙、國學院雜誌)を概觀して漢人の北方民族より受けたる政治的經濟的法律的言語的文學的宗敎的人種的影響を論じ元淸の對漢人政策を比較し元

が非干涉主義、清が迎合主義なりしを說明せる、「慈覺大師の入唐紀行に就いて」(岡田正之、東洋學報)日本唐と百濟又は新羅との三國關聯の史實として百濟滅亡時其の遺臣が唐の捕虜を我邦に送りしこと、並に我邦と唐とに關係を有せし新羅の重臣張寶高の事蹟を檢出することを得る、「葡萄牙人支那渡來顚末、同補遺」(矢野仁一、東亞經濟研究)はチンチェオ(漳州)の通商殖民につきて其の位置其の廢絕事情、ラムバカオに出入したる事情、マカオ殖民地の由來、嘉靖四十三年の柘林海兵の叛亂以前よりマカオに葡人のありし證據、靑州の天主堂燒棄事件の復讎として葡人が支那人に暴行せし顚末、ラザルスカタネウスの支那帝位覬覦嫌疑、等を述べ「明の太祖と紅巾の賊」(和田淸、東洋學報)との關係を調べ、朱元璋が韓林兒の餘黨たりしことを大明實錄が隱蔽してより其の風踏襲せられしも、朱元璋が郭子興に望を絕つや甘んじて紅巾賊より左副元帥の稱を受け紅軍の大宋皇帝の別稱大小明王の名より大明の國號すら立てたる事情を說き、「支那の土匪兵士に對する基礎智識」(後藤朝太郎、外交時報)

としては强盜團、馬賊、苦力、博徒、兵士、巡査巡警が一種の遊民階級にして良民より見れば皆要するに匪徒たるべく、彼等は晩春初夏の頃より人情を超越せる殘忍性を發揮して良民を苦しめ、國を超越し永久性を備へて擾亂を逞くすることを知るべきであり、「南支那に於ける大家族制度」(淸水泰次、東洋)の標本として廣東市街高第街の許氏一族に關する見聞を述べ其の崩壞傾向の中に又一種の新らしき傾向潛在するを指摘したる、正統論は初は民族內面の問題なりしが漸次民族的色彩をを發揮し通鑑綱目の如く非漢族の朝廷を閏朝とし一種の宗敎化を爲すに至りし「支那學徒の謬想」(稻葉君山、外交時報)を指示せる「支那及露西亞の司法制度」(稻田周之助、同誌)を比較して支那に領事裁判制を支持するの必要ある如く、露西亞に國際裁判制を設けて外人の生命財產を保護するを要することを謂へる、支那漆器の名稱材料製作法着色より其の起原、宋元時代の犀毗器皿、剔紅器皿、推紅、假剔紅、罩紅、戧金器皿、描金器皿、攢犀器皿等の歷史的發達を叙し、日本漆器と彼我助長の事情、明代北京の

果園廠漆器製作所、乾隆より現代に至る各地の漆器を詳說せる「支那漆器の既往と現在」（西山榮久、東亞經濟研究）も亦好讀物たるを失はない。若しそれ「琉璃考」（松本文三郎、藝文）と「宿曜經の科學的基礎」（隈本有尙、丁酉倫理會倫理講演集）との研究に至つては興味あるもので、前者は印度人の至寶とする琉璃は南方印度 Panoga 山中に自然に生ずる珠玉にして人造物に非ず、その人造品は假琉璃と稱せられ支那のものは多く硝子なるを證明し後者は宿曜經に春分朔、曜躔婁宿、命爲歲元の三句あるは星學上千古無比の現象に係り、紀元前三一〇二年の曆元も之を以て推察し得らるゝを謂つてある。史料の本文研究並に紹介に於ては「易疑」（內藤虎次郎、支那學）がある。これは古說と異なる創見に立ち甚だ興味ある研究にして彖傳象傳中に經文の原意を失ひ特別の解釋を下されたるありて譬へば大畜の卦に良馬の語あり。爻に童牛豬豕の語あれば此の畜は本來は獸畜の意味なりしなるべく戰國末より漢初の間に成りし帝の字が帝乙として爻辭の中に含まれ、乾、蒙、臨、復、頤、井、兌の諸卦に爻名六種揃へるもの稀なるより見て其の本來は六爻より成れるには非ざるべく、又た筮は巫の使用したる一種の籤にして之に四五種の小名附せられ、之が今日の爻辭となりしものなるべく、易經が今日の體裁に整頓せられたるは蓋し秦末漢初の頃ならむかと推論せられて居る。「漢蕃對音千字文の斷簡」（羽田亨、東洋學報）は一九〇八年ペリオ氏が敦煌より獲たる學界稀覯の珍史料にして少くとも中唐時代のものたるべく、其の寫し出だせる字音が相當正確なる爲、以て唐中期以前敦煌地方に行はれたる字音を知るべく、其の中我が邦に行はるゝ漢音に類似するものあるは興味深きことで、今音の ung に終る京兵英に ke, pe, e の音を附し、ang に終る邯相藥に mo syo no の音見え、語尾 ng 音の脫落せるもある。語尾 ang は o に a-g は o に、ing は e 又は en に eng は e に、ung は on に成れるもの多く、k, p, t の入聲が g, b, r となりて保存せらるるなど中唐時代の漢字の音を研究する上に於て無二の好參考資料たる譯である。「釋迦牟尼如來像法滅盡之記」（同人、史林）も亦ペリオ氏が敦煌に獲て今巴里國民圖

書館に所藏せるもの、其の譯者法成の事、並に大番の二字の卷首に存せゝものならむことを謂つて居る。「善導大師本具兩疏弘傳考」「藤原猶雪、史學雜誌)は善導疏成立の年代を貞觀永隆の四十餘年間に擬定し、善導の思想を引用したる最初のものは懷感の群疑論卷四の禮讃の專雜二修の文であり、智昇の集諸經禮懺讃儀の往生、禮讃偈一卷比丘善導集記を之に亞ぐものとし、元照の觀經義疏戒度の觀經疏扶新論、觀經義疏正觀記、兩宋の宗曉の淨業、專雜二修京師比丘善導、あれば善導の著述中禮讃の全文と法事般舟兩讃の引文は明かに唐朝文獻に之を索め得られ、これが入宋僧明信の記載と合致する事より施きて日本に於ける其の弘傳を詳述してある。「支鏡祕府論を校勘して」(鈴虎雄、支那學)其の引用して今日佚書となれるものあるを擧げたる、「梁皇侃語義疏に就て」(武內義雄、同誌)那疏竄入の經路を證明し、那疏は舊卷に本の紙背に在りしこと、現存皇疏に二種あり皇疏本の舊容は子本疏義と同じかりしならむかを謂へる、「注維摩經の研究」(佐々木功成、龍谷大學論叢)を爲しては開元釋敎錄

所見の七譯の中三存四闕の事情より、本經に對する羅什及び其の門下の研究、卍字續藏本、縮刷本の起原並に羅什、僧肇、竺道生の三論思想を考察せる、「左傳引經考證」(小島祐馬、支那學)は儀禮、禮記、周禮と一致する點を指摘し、之を以て三禮の材料となりし幾多の事項が早くより覺書の形にて傳はり居りし證左としてある。「淮南子の歷史」(倉石武四郎、同誌)も亦淮南子の本文の撰述せれし歷史的研究を特に入念に試みたるものであり、「明清兩朝の文書の發見に就きて」(神田喜一郎、同誌)最近の報道を傳へ、舊清廷の內閣大庫に儲藏せられし貴重なる根本史料が國立北京大學と羅振玉氏との手に歸せし顚末を王國維氏の庫書樓記を引きて告ぐる所がある。物故したる支那の名儒「沈子培先生事略」(岡崎文夫、同誌)を揭げたる、康熙八年滿洲軍が江蘇省揚州を陷れ暴虐を縱にせし時遭難者の一人揚州の王秀楚が其の目擊する所を叙述せしを以て有名なる「揚州十日記」(宮原民平、東洋)を和譯して通俗的に紹介したるもあれば、「伊曾保物語の漢譯について」(新村出、藝文)明の天啓五年羅馬舊敎の宣

教師金尼閣（ツリゴールト）が口授し南國の張庚が筆記せしものが況義と題せられて巴里の國民圖書館の寫本室に所藏せらるゝを一瞥せし見聞記もある。次に論著の批評並に權威ある紹介としては張之洞の門下鄭孝胥の「海藏樓詩を讀む」（狩野直喜、藝文）時、彼が或る時期に王孟韋柳の風を學び次に孟郊梅堯臣、王安石元好問を好み自然其の作品に世を拗る鬱屈の滋味あるを覺え、今日支那に於ける詩壇の後勁として重んずべきものなるを知るべく、「ル・コック氏著摩尼教遺文卷三」（羽田亨、同誌）の批評に於ては、高昌出土のトルコ語摩尼教遺文ウイグル・マニ兩文四千種ありて漢譯波斯殘經の誤脫を訂正すべき好史料に富める事を論じ、其の中にはイソップ物語さへある事を指摘してある。「エリオット氏著印度教と佛教特にその一章中央亞細亞の條に就いて」（石田幹之助、東洋學報）佛教學者として令名ある著者が印度に及ぼせるクリスト教の影響、西方に及ぼせる印度の感化、印度に於けるベルシャの感化、印度に於けるマホメット教に就き論述する所を紹介し、吐火羅語なる名稱の適用の可否を論じ、又た回鶻語と稱するものに就ての見解に就きても多少の批判を加へたる、「支那に於けるザラトゥーシトラ教に就いて」（同人、史學雜誌）國立北京大學教授陳垣氏が摩尼教入中國攷、同補遺二冊、火祆教入中國考の論著を公にしたるに對し補足的批評を加へ薩保、薩甫、祆祠祭禮の有樣、祆字の歴史、穆護祓につき更に知見を述べて論證したる北京大學にて講義したる「ラツセル氏の新著支那問題を讀む」（長岡克曉、東亞經濟研究）や支那文化特色として表意文字の使用、智識階級が儒教を以て宗教とせること政府が試驗制度の生みたる學者にて組織せられたる各項を擧げ日本を罵倒し、支那は中央集權的國家を缺き個人の自由著しく發達したれば無政府主義に適したるも、個人の自由商業を生命とせる故ロシヤのボルシェヴィズムは支那に適せずと論破せることを注意せる、「ロスドヴツエフ著南露に於けるイラーン族とギリシャ人」（高橋邦枝東洋學報）が南方露西亞發見の考古的資料に基き西紀前四世紀末及び第三世紀のスキュタイ人、サルマティヤ人につき研究する所を摘譯紹介せる、何れも有益なるもの

と謂ふべきであるが、「池内博士の元代の地名開元の沿革を讀む」（箭内亙、同誌）に至つては兩々滿を持して降らず眞摯なる研究は遼東開元二路併存說、開元路治三姓附近說に對して前說を守り全く見解を異にする理由を高唱し、「國立北京大學國學季刊第一卷第一號を讀みて」（那波利貞、藝文）支那に於ける新學派の人々が支那學研究に對する改造的抱負盛なるを賞揚し、而も民國九年より十一年の頃に兆したる國粹文化主義思想が學界にも反映せる痕迹あることを指摘し、馬衡君の石鼓爲秦刻石考に就て批評を加へたるもある。歷史地理問題としては「眞如親王の記念と新嘉坡」（新村出、歷史と地理）を擧ぐべきであらう。明年は實に親王の一千六百年忌に相當すれば親王の雄圖の爲將た學界の爲、記念研究必しも無益ならざるを提唱し、三代實錄所記の蕃去地羅越國につき老撾國說を否定し廣東より馬來海峽に入る航海路に擬定すべき理由を論述して居る。紀行に於ける「充豫紀行」（岡崎文夫、歷史と地理）は曹州、歷山、泰安、泰山、泰廟、孔廟、孟廟、南京、開封の山川風物地勢古蹟を語り、「南嶽馬祖の跡を訪ねて」（村上素道、禪宗）道觀半雲亭、祝融峰、上封寺、七祖道場、白果樹と磨磚臺、最勝輪塔、馬祖菴の現狀を記述せる、「西部支那の旅より」（鄕間正平、東方時論）海防、河内、雲南、大理、南麗江、甸城縣、ビルマ方面の見聞を叙述せる如き珍らしき方面のものもあり、抗州南京地方に關する「南支旅行雜觀」（大野隆德、太陽）、「南京の明の故宮阯」「南京城外謁孝陵」「南京北極閣登臨」（以上三篇那波利貞、歷史と地理）の如きもある。吾人の寓目する能はざりしものにも亦金篇玉什無きを保し難きも以上は先づ昨年度に於ける我が邦東洋史學界の大綱であると思ふ。〔那波〕

西洋史　西洋史に關する著書中昨年に於ける最大收穫は、箕作元八博士著「西洋海事史」と「ナポレオン時代史」とであらう。前者は、古代から十八世紀半英國海上覇權の確立にいたるまで、海洋に於ける諸國民の歷史的活動を叙してゐる。就中サラミス海戰に關する博士獨特の見解、十七世紀に於ける英蘭兩國の海上爭覇戰についての記述の如きは、それだけで價値ある研究である。」ナ

ボレオン時代史」は、先年出版された「第十八世紀佛蘭西文化史」「佛蘭西大革命史」と共に博士の三部作ともいふべく十八世紀英佛植民政策の衝突、シーレイの所謂近世の百年戰役といふ世界史的觀點からナポレオン時代の佛蘭西を考察し、ナポレオンの世界史的活動の目標が英國海上帝國の倒壞にあつたことを指摘し、それと同時にナポレオンの內政外交上の機略、彼の宮廷における內的生活に至るまで餘蘊なく叙述されてゐる。次に歐米史學關係の傑作を我國讀書界に紹介する目的で、それらの飜譯が少かず現はれた。慶大史學科出身者が集つて計畫した「泰西名著歷史叢書」全十四卷、(國民圖書株式會社)はその優秀なるものであらう。これは「クウランジュ、希臘羅馬史論」、「ギゾウ、歐洲文明史」、「ブライス、神聖羅馬帝國」、「ブルクハルト、ルネーサンスの文化」、「ランケ、歐州近世史」、「グリーン、大英國民史」三卷、「テーヌ、大革命前の佛國」(佛國近世史の一部)、「チーグレル獨逸思想史」二卷、「ハウォルス、米國近世史」、「ヘルデル、歷史哲學」二卷を含む計畫である。原著の標題は便宜上改題されてゐるのもあるが、內容は原本の忠實なる飜譯である。惜むべし、この重要なる計畫も、田中萃一郎博士の不慮の災厄と震災とのため豫定の計畫通りに進行せず、僅かにその一部のみが現れたやうである。尙「バックル、世界文明史」全六卷(西村二郎譯、而立社)がある、實證論の立場に於て群集現象の統計的觀察によつて歷史の一般法則を認識し、曾て一時歐米史界の注目を集めたるバックルの史觀が、遲れ馳せながら、我國一般讀書界に紹介されたのは欣ふべきであらう。次に雜誌論文の內で注目すべきものまた少くない。古代史の領域では、「世界史より見たるパウロの意義」(山谷省吾、史林)がある。聖パウロがヘレニズム文化敎養によつてイエスの信仰を偏挾なユダヤ敎から分離せしめ、こゝに初めて基督敎會に新宗敎たるの自覺を起さしめ、次に自分の熱心なる傳道によりて基督敎をヘレニズム文化世界に植えつけたる彼の業蹟が世界史上如何なる意味を有つかを闡明してゐる。「羅馬帝國の長城」(坂口昂、歷史と地理)は先年著者がザールブルグ羅馬陣屋遺跡視察の結果と文獻とに

よつて帝政時代羅馬のライン、ドナウ邊境における對ゲルマニ政策の變遷を論じた有益な讀物である。中世史の方面では、「民族移轉について」(植村清之助、史林)がある。先づ Dopsch の「歐州文化發展の經濟的社會的基礎」の說、卽ち民族大移動時代のゲルマニが、それ以前の民族移轉運動に對して有つ特色は、前者がより、開化せることにあるといふのを駁して、その特色は、彼等が羅馬帝國に入つてその foederati となつたことにあると斷じ、次に大移動時代に帝國內に占據せるゲルマニの狀態につき獨佛學者の諸說を批判し、ゲルマニに關する史料を吟味したる後、大移動時代のゲルマニ諸族は、旣に國家團結を失ひ、未だ國民的統制を具ふるに至らず、併し血族團體としての結束は決して崩れない、移住民の群れであると結論してゐる。「ダンテより見たる羅馬加特力教會と神聖羅馬帝國」(黑田正利、表現)、「中世末歐州社會に對する一考察」(植村清之助、歷史と地理)、「一三八一年の英國農民一揆の原因に就ての經濟史的研究」(久保田明光、國民經濟雜誌)はいづれも中世末期における興味ある問題を取扱つて有益なる記述をなしてゐる。近世史では、「ルネーサンスとリフォルメーション」(植村清之助、表現)は近世の初におけるこの二大文化現象の關係を叙してゐる暗示に富んだ論文である。「ウエラウ和約の觀察」(長壽吉、歷史と地理)「エムデン亞細亞會社の遠航船」(同人、同誌)は、プロシヤの十七世紀後半におけるバルト海南岸における發展と、十八世紀における東亞通商上の活動とを論じ、「國富論に現はれたるアダム・スミスの政治思想と彼以後における英國政治及行政改革の基調」(蠟山政道、國家學會雜誌)は、スミスの國富論に現はれたメルカンチリズムの批評、植民政策、通商條約に對する考、自由貿易說、結社觀、國家職分論及びスミス以後の政治經濟思想を吟味し、これらか英國近世史上の政治生活に如何に影響したかを考察し、「フランス大革命と猶太人の解放」(時野谷常三郎、歷史と地理)は佛國大革命における猶太人の潛勢力が過激共和黨を結んで彼等の解放を達成したが、これと同樣の現象がロマノーフ家露國革命にも現はれたことを指摘し、「モン

ロー主義宣布當時の歐洲外交」(同人、同誌)「米國政黨の起原」(恒松安夫、史學)「愛蘭自治運動」(小島機一、歴史と地理)はいづれも近世政治史上の重要問題を考察したものである。「國際裁判の歴史的研究」(岩田喜一郎、國家學會雜誌)は、國際仲裁々判と國法司法裁判とについて歴史的考察を試み、先づ國際裁判の必要を法律、社會上から論じ、次に其歴史的發展が遲々たる原因を究明し、然る後その發展の徑路を辿つて叙説してゐる。古代中世に於ける國際仲裁々判は、近代のそれと意義を異にすること、中世末期伊太利諸都市國家の間に不完全な形式で生れた近代的意義における國際裁判が、近世に入つて遽かに君主專制主義的國家の發達のために、發展を阻碍されたことを指摘し、十九世紀に入つて急激な發達を遂げた動機はアラバマ號事件なること、これが一轉回點となつて遂に一八九九年第一回平和會議に於て一大飛躍して常設仲裁々判が出現し、大戰後國際聯盟の力により遂に常設司法裁判が設けられたことを叙し、最後に國際裁判の將來を豫想した。尚、「最近歐米史界管見」(三浦周行、史林)は著者自身の視察報告である、大戰後歐米史學界の支配する史風が政治史に重きをおいてゐること、一般史學者の間に唯物史觀は勿論、リッケルト歴史哲學が吾國における程重要視されてゐないこと等についての歐米史學大家の談話　傾聽すべきである。又歐米各大學における史學研究室及びこれに關連した史學研究機關の特質について鋭き觀察が報告されてゐるから、戰後の歐米史學界の狀況を知るには好讀物たるを失はないであらう。〔安藤〕

考古學　昨大正十二年の考古學界の業績を綜觀するに當り、先づ石器時代の分野に就いて見るに、數年前の人目を驚かす樣な發見はなかつたが、遺跡の基本調査の報告に、またそれから導かるゝ綜合的記述に注意すべきものが少くなかつた。即ち前者では「愛知縣渥美郡福江町保美平塚貝塚發掘概報」(大山柏、人類學雜誌)は前年十月小金井博士と協力發掘調査して十九躰の人骨を出した同貝塚に關する記載であつて、出土の土器や其他の遺物に特に見るべきものゝあることと埋沒狀態とを鮮かに

描き出したもの、「三河に於ける見聞」(後藤守一、考古學雜誌)は同じ保美貝塚の一部に就いて、前者に先立つて行つた小試掘に對する土器の上に現はれた特色を記述して併せて從來の發見品に及び、更に銅鏃の出た附近の大木貝塚と靑塚古墳とに及んでゐる。前年から續いた淸野博士の考古學關係の調査記錄とも云ふべき「考古漫錄」(社會史研究)には常陸霞ヶ浦沿岸の諸貝塚をはじめ、多數の人骨を發見した三河稻荷山、同吉胡天崎、遠江蜆塚の諸貝塚、肥後備中等西日本の諸貝塚等に關する簡明にして而も要を盡した記事が收められてある外、石器時代の人骨に關聯した諸問題に就いての興味ある見解が示されてある。「島城山の岩窟と貝塚」(鳥居龍藏、敎育畫報)は前年著者の調査に依つて學界に著聞するに至つた特殊の遺跡に就いての概報であり、「伊豆大島にある熔岩流下の有史以前の遺跡」(同人、中央史壇)は震災にちなみて此の興味ある遺跡の意義を說いたもの、また「加賀能登の古代遺跡」(上田三平、福井縣報告)の前半は兩國の同代遺跡遺物を一々記述した丹念な報告であり。武藏目黑の上高地に於ける先史遺物遺蹟及び文化の化學的考察」(村本信夫、社會史研究)は發見の土器に對して特に化學上の觀察を試みてゐる。以上の外遺跡遺物の報告さして數ふべきは關東及び東北方面に於いて昨年發掘調査の行はれた武藏の「保土ヶ谷貝塚雜誌」(八幡一郎、人類學雜誌)をはじめ「相模川沿岸の二三石器時代遺跡」(同人、武相研究)、「武藏國橘樹郡宮前村野川石器時代遺跡報告」(谷川磐雄、考古學雜誌)、「北海道北見國禮文島の石器時代の遺物」(八幡一郎、人類學雜誌)があり。近畿では「三河國北設樂郡上津貝村鞍舟石器時代遺跡報告」(夏目一平、考古學雜誌)、新に出土した遺物を載せた「再び大和唐古の遺跡に就て」(梅原末治、人類學雜誌)繩紋土器を出す「京都帝國大學農學部敷地の石器時代遺跡」(京都府報告)、彌生式系に屬する「丹後に於ける二三の史前遺跡」、「京都府下發見の石器に就いて」(同上)「河內北八下村の石器時代遺跡」(高橋直一、考古學雜誌)、簡明に遺跡遺物を表記して「大和に於ける石器時代遺物發見地名表」(森本六爾、大和)等を擧ぐ可く、九州では「肥

後國下益城郡當尾貝塚」（島田貞彦、考古學雜誌）がある石器時代の遺跡、遺物、文化に關する綜合的記述及び研究には、先づ人骨の方面に「日本石器時代人の埋葬狀態」（小金井良精、人類學雜誌）があつて、從來學界に紹介せられた凡ての資料を網羅して、（一）骨骼占位の地表よりの深さ、（二）同地層の狀態、（三）骨骼の姿勢、（四）同占位の方向等に分つて綜括記述の上、一の歸結を求め、なほ伴出の裝飾品に就いても考察してある。「日本石器時代人の齒牙を變形する風習に就いての追加」（同人）及び石器時代人の拔齒に就いて、第二（長谷部言人）の二篇は、共に前年發表せられた論著に對して、其の後の新資料に基き、得た研究の業蹟を錄したものであつて、前者には拔齒に性的差別のあることゝ、大齒を主として拔いたものには男が多いことを指摘してあり、後者は我が石器時代人の拔齒形式に二系あることから、拔齒そのものゝ起源に考察を及ぼしてゐる。次に「石器時代に於ける關東と奧羽との關係」（鳥居龍藏）は兩地發見の土偶の比較から從來多くの學者が說く處の、奧羽の石器代は關東のそれよりも新しいとする見解に反し、同代既に兩地は各特色のある所產を有して相互に影響を與へたものであると論じ、「一個の禮文島土器に就て」（同人）は北海道北見國の沿岸にある同島の石器時代土器中に北海道に通有の者の外、薄手式の特色のある一遺品の發見を擧げて其の同島に存在もる理由に說き及んである。「梅原氏の鳥取縣報告を讀みて」（同人、以上人類學雜誌）は前年現はれた論著に對する紹介批評であるが、內に博士の我が石器時代に對して懷かれてゐる見解を隨所に示したものとして、同代に於ける我が人種を概觀した「原始時代の人種問題」（同人、中央史壇）と併せ觀る可きである。「石器時代の宗教思想の一端」（谷川磐雄、考古學雜誌）は初に繩紋學石器代の土偶、把手、裝飾品等に表はれた動物形模造品を檢出して、これ等を一種の宗教的の遺物と解し、當代トテミズムの存在したことを推測し、また石棒土偶、石冠、土瓶口等に生殖器關係の表現のある資料を求めて、前年鳥居博士の說いた當代性崇拜のあつたことを肯定した。「谷川氏の日本石器時代トーテミズム論を

讀む」（八幡一郎、武相研究）はトーテム其の物の性質からして如上の見解にはなほ幾多の考察を餘すことを說いたもの、「吾人祖先有史以前の男根尊拜」（鳥居龍藏、人類學雜誌）は和泉四ッ池發見の一土製品に依つて其の崇拜の彌生式派の石器時代民衆の間にも行はれたるべきを想定し、更にこの起源を遡つて東北方亞細亞大陸のそれに及んである。以上の外石器時代に關する方面では中央史壇が原始時代號二冊を出版して、中に「原始人類」（松村瞭）、「第三紀人類」（長谷部言人）、「亞細亞の石器時代」（鳥居龍藏）「亞米利加の石器時代」（移川子之藏）等の西人の研究の紹介及び概括的な論著の收められたことを記すべきであろう。石器から金屬器に移る過渡期とせらるゝ遺物遺跡の調査研究は前年に比して頗る著しいものがあつた。朝鮮總督府公刊の「金海貝塚發掘調査報告」（濱田耕作、梅原末治）は南鮮に於ける此の顯著な遺跡に對して、段掘り法に依る發掘調査の結果を錄して、出土遺物の示す處から金石併用期の遺跡であることを論じ、當代日鮮兩地の關係に及んだもの、「銅鉾銅劍考」（高橋健自

考古學雜誌）は前年から續いた雄篇であつて、昨年に入つて伴出の鐵器、古錢、窯器、璧、玉類等の精査から、鉾劍の性質を考究し、轉いて我が磨石劍の形と分布とを調査して、これが前者の影響に基くことを形狀と手法とを併せて立證して、銅鐸との接觸に及んで論を結んだ。「日本青銅文化の起源」（同人、同誌）は如上銅鉾銅劍考の概要に銅鐸の性質に關する見解を附加して、此の過渡期の文化を考へてゐる。「銅劍銅鉾に就いて」（梅原末治、本誌）は高橋氏と同じ遺物を對象として、先づ形式論及び年觀より發足して、その我が上代文明發達の上に占むる位置を論究せんとの試みであるが未だ完結せない。此の銅鉾銅劍と密接な關係のある遺跡では甕棺が特に注意せられて、其の報告に「筑前小倉附近の埋沒大甕」「埋沒合口甕」（中山平次郎、考古學雜誌）等があり、何れも遺跡の發掘調査の記錄である「筑前朝倉郡平塚の甕棺」（梅原末治、藝文）等があり、「甕棺陶棺について」（後藤守一、考古學雜誌）は兩者の性質を論ぜんとしたものであるが、甕棺に就いては石器時代の人骨を容れた甕と九州の甕棺

こを說いて、兩者の間に關係の認むべきものゝ少ないことを云ひ、陶棺の方は其の形式上の研究を試みてゐる。前者に就いては既に「上代墓制の沿革」(梅原末治、中央史壇)と前掲の「銅劍銅鉾に就いて」にも同一の問題を說き、ほゞ相似た見解が載せてある。なほ「阿波に於ける石塚及び方狀石籬」(笠井新也)には甕棺を藏した石塚の構造が錄されてゐる。北九州地方の同代の諸種の遺跡の報告中「三雲字南小路に於ける特殊埋藏物發掘地點」では文政五年豐富な遺物を出した同遺跡の地點を當時の記事を實地と對照して明示してあり、「燒米を出せる竪穴址」は筑後八女郡長峯村に於ける稀に見る遺跡と燒米の存在狀態を擧げ、那珂郡竹下出土の燒米に及んだもの、「筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石」(以上中山平次郎、考古學雜誌)は北九州に往々見る立石及び板石の著し例として表題のものを錄して、其の銅鉾銅劍を藏する原始古墳との關係に想倒したもので、向後の研究に新生面の展開を暗示してゐる點が注意に値する。次に銅鐸に就いては資料の報告に「大和山邊郡丹波市町石上發見の銅鐸と其の出土狀態」(梅原、小泉)「讃岐國三豐郡一ノ谷村左門發見の銅鐸に就いて」(上原準一)「朝鮮出土の小銅鐸と細文鏡」(藤田、梅原、以上考古學雜誌)の三篇があつて、上原氏の文には讃岐に於ける鐸と銅鉾銅劍との接觸に及んである。「淡路出土の一遺品を記して銅鐸の形式分類に及ぶ」(梅原、藝文)は從來の銅鐸の形式分類になほ淡路出土の一遺品に見る小形厚手の一類を加ふ可きを提言し、而も其の古き形なるを云へるもの、我が國の「銅鐸は何民族の殘した物か」(鳥居龍藏、人類學雜誌)は鳥居博士の抱懷してゐる銅鐸論の梗概で、南支那の苗族の銅皷と密接な關係があると云ふ年來の主張を繰返したもの、たゞ中に銅鐸の原形は胴の骨組を木で作つてそれに裝飾を加へた類であつたらうとの「日本青銅文化の起源」に載する處と同一の新說が加へられてある。「人類學より見たる南支那」(同上)は前者の論の根據をなすものとも見るべきであらう。原史時代遺跡の主要部を形成する上代古墳墓の調査研究では「近江國高島郡水尾村の古墳」(濱田耕作、梅原末治、京都大學報告)が、明治三十五

年發掘せられて石棺の內外から各種の貴重な遺物を發明した同古墳に關する研究であつて、本論を分つて二とし第一の記述編では遺跡遺物の全體に亘る詳しい記錄を擧げ、第二の考證編に於いては、古墳外形の復原、耳飾、冠、沓、環頭太刀、鹿角製刀裝具等の主要遺物に考察を加へ、或物には聚成圖を載せて、是等の資料に基いて古墳の年代と其の示現する文化とを論じたものをはじめ、「加賀能登の古代の遺跡」の古墳の部分は珍らしい決皇山の横穴以下廣く兩國に亘る遺跡遺物を記錄してあつて、古代に於ける開化の狀を窺ひ得る纏まつた記述がある。一々の古墳の報告には前方部から石器、甕片等が出たと云ふ「大和高市郡畝傍ィトクノモリ古墳調査報告」（森本六爾、考古學雜誌）、古鏡の出た古墳墓では泰始元年鏡等を副葬してゐる「但馬國神美村の古墳と發見の遺物」（藝文）、「豐前宇佐郡赤塚古墳調査報告」（考古學雜誌）「伊勢一志郡豐地村の二古式墳」（後藤守一、同誌）、「大和磯城郡柳本大塚古墳調査報告」（梅原、森本）出土の畫象鏡を詳記した豐後西國東郡の「鑑堂古墳に就いて」（南善吉同誌）等の著しいものがあり、「大和添上郡大安寺村野上古墳」（猪狩忠英、歷史と地理）は石室の大井石に石棺蓋と同一製作のものを用ひた珍らしい遺跡を錄し、肥後國楢崎の古墳に就て」（同）は一墳四棺を瘞めた特殊の圓墳の報告である。以上の外畿內では「大和國松山葡萄鏡出土の古墳」（同上）「同櫛山の古墳」（森本六爾、同誌）前方部に竪穴式石室を營んだ山城「乙訓郡寺戸の大塚古墳」唐鏡を副葬した同「向日町長野の墳墓」があり、山陰では丹後「男山法王寺の古墳」（以上京都府報告書）と「出雲國八束郡岡田山古墳調査報告」（中央史壇）の二編、九州方面にては「筑前國底井野の横穴群」（柴田喜八）、石棚のある横穴式石室を正確に記した「肥後國西北部の古墳」（坂本眞鈴、以上考古學雜誌）、「豐後北海部郡に於ける二三の古墳」（歷史と地理）、一墳に竪穴式石室と箱式棺とを瘞めた「豐後八坂村本庄の古墳」（以上梅原、大分縣報告）等の諸篇と「大隅に於ける古墳の分布及び其の概觀」（瀨之口傳九郎）及び「鹿兒島縣の古墳分布に就いて」（山崎五十麿以上考古學雜誌）の二編の共に大隅に於ける有明海沿岸

に濃厚な分布を示す所謂我が極南古墳群を紹介したものを數へることが出來る。歴史時代に入つての遺跡の調査研究では古寺址に「武藏國分寺址の調査」(稲村垣元、後藤守一、東京府報告書)の長篇が、同寺の沿革から說き起して寺址の現狀と發見物とを精細に載せて、特に古瓦の記事に見るべきもの多いのも擧ぐ可く、「益須寺の遺蹟に就いて」(橋川正、歴史と地理)は近江、野洲郡吉身村の東南字野上にある推古式の古瓦を發見する古寺址を以て持統紀の益須寺なるべきを考證したもの、「山城綴喜郡井手寺の遺跡」(歴史と地理)と「瓶原國分寺址」(以上梅原、京都府報告書)とは京都府下の著しい二寺址の紹介であつて前者には梅の宮との關係から橘氏の創建なりと云ふ古傳の依る可きを說いてある。これは發見の古瓦に依つて寺址を推定し併せて沿革を書いた大和生駒郡の「施鹿恩寺及平隆寺考」(保井芳太郎、大和)主として古瓦を紹介した武藏「影向寺發見の古瓦に就いて」(谷川磐雄、武相研究)と併せ見るべきものであらう。寺址以外では「大宮賣神社」(京都府報告書)は境内から彌生式土器と共に石蠟模造品を出す面白い事實を書いたもの、「雄勝城阯考」(深澤多市、歴史地理)は奈良時代出羽國の築造に係る同城址に關する諸說を紹介批評して實地調査の結果、地名地形遺物等の方面から、遺址を雄勝郡新成村大字足立から高尾田に亘る邊に求むべきを考證したのであり、「錢司の遺跡」は山城瓶原の東にある其の遺址と坩堝、銅滓其他の遺物に基いて、同地の鑄錢の奈良朝後半期にあるべきを推したもの、「山城花脊村の經塚及び關係遺跡」(以上京都府報告書)は前年同地に於いて前後三回に亘り發見した經塚出土品の記錄で、遺物中に仁平三年の銘のある經筒と毘沙門像を納めた圓筒形厨子とがあるので注意を惹く。なほ昨年は石佛に關する二三の著しい論著を見た。即ち「大分の石佛に就きて」(小野玄妙、美術院報告)は豐後の多數の石佛を概說して、佛敎の經軌と其の示す手法、及び周圍の事情から其の年代を考へたもの、「磐城國相馬郡福浦村大字泉澤の磨崖佛に就て」(小柴忠七郎、福島縣報告書)と「下野の石佛」(丸山源八、考古學雜誌)とは新に東北の地で見出された優秀な作品を精細に紹介

してある。轉じて遺物及び其の綜合の方面を見るに考古學の基準を形造る處の土器の研究には「土器製作基礎的研究」（大山柏、單行）があつて、原料、成形、燒成の三方面から從來斯學者の閑却した點に一の新見解を加へてある。「上代土器に關する一考察」（梅原末治、思想）は我が彌生式土器と陶質器とに關する日鮮兩地に於ける差違に注意して、その合理的解釋から兩地の關係に及んでゐる。「原始時代の武器・武裝」（後藤守一、中央史壇）は古墳から出土する關係の遺品を列記して、現時學者の得てゐる見解を概記したもの、「再び巴形銅器に就いて」（同人考古學雜誌）は其の形の上の起源は帶金具の釦樣裝飾品にありとするも、巴形品に到つては、宗教的意味が加はつてゐたらうと云ふことを、類例を西方の諸民族に求めて推測してある。「仿製支那鏡に就いて」（梅原末治、藝文）は支那古鏡の模作が單に日本に限らず、支那の周圍の地方で行はれた例證を擧げ、朝鮮のそれと本邦の製作品との關係を論じたもの。埴輪に就いては「考古漫錄」（前出）に圓筒の埋沒狀態と、其の孔、箍等に關する實物上からの興味ある見解の示されたのと、「埴輪土偶の美術としての領域」（福原武、中央美術）が美の對象として遺品の持つ價値を論じた特殊の一篇とがあつた。「原始時代の建築」（關野貞、中央史壇）は先づ記錄の上に現はれた上代の建築を考へ、次に神社の構造に遺存する形式と家形埴輪及び鏡の文樣に見ゆる家屋に依つて當代の建築の如何なりしかに就いて試みた綜合的記述である。特殊の遺物の研究として「攝津高槻在東氏所藏吉利支丹遺物」（新村出）は其處に珍らしくも遺存した同代の繪畫、版畫、彫刻、メタル等に對して解說を加へ、吉利支丹抄物に就いて精彩なる研究を載せたもので、「京都及其附近發見の切支丹墓碑」（新村出、濱田耕作）が、現存の墓碑の形式、記銘の調査から、其の我が墓石との關係を考察し、また他方發見の地點から南蠻寺の問題にも論及した一編と並稱すべくなほ同じ切支丹關係の論著には「切支丹合字入鞍及南蠻人繪鞍」（濱田耕作、梅原末治、以上京都大學報告書）の一文と、前者に關聯して「北攝にて發見したる基督教遺物」（橋川正、歷史と地理）が其の後更に同

地より見出された墓碑、繪畫、彫刻等の遺物を錄したものとを擧ぐ可きである。「金鼓と鰐口」(香取秀眞、單行)は現存遺品の銘文集を擧げ、此の佛器の起源變遷を說き其の鑄造法に就いては技術上からの考察を加へたものなほ前年より引續いた遺物の研究には和鏡の年號銘ある遺品を年代順に解說して、其の發達の痕を徵せんとしてゐる「紀年銘鏡に就きて」(廣瀨治兵衞、考古學雜誌)を見、また「京畿地方に於ける古瓦文樣の研究」(伊藤清造、同誌がある。考古學上の事實に基いて上代の文化を論じたものには「考古學上より觀たる上代の畿內」(梅原末治、考古學雜誌)と「考古學上より見たる上代日鮮關係」(同人朝鮮)との二編があつて、一は石器代から金屬器の影響を受けて宏大なる墳墓を興すに至つた徑路を銅鐸と古鏡を藏する古式の墳墓の構造から辿り、後者は特に金石併用期と六朝中期とに於ける兩者の關係を論じ、南鮮の內地の文化發達に及ぼした影響を觀察したもの、「上代文化の地方相」(後藤守一、中央史壇)は我が上代の土器及び銅器に就いて、其の異同な考査して當代の地方相を察せんとの試みであつて、なほ古墳に考察を進むる豫定の樣に見ゆる。「耶馬臺國の位置に就いて」(橋本增吉、史學)前年表はれた「考古學上より觀た耶馬臺國論」即ち大和論に對して、其の議論の根底をなす古鏡の年代觀はなほ疑を挿むべく、從つて其の結論また信ずべからず、同じ鏡に發足せる上述梅原の所說また據るべからざるを說いたのをも數ふ可きである。「日本考古學懷舊談」(有城鉛藏人類學雜誌)は我が國に先史考古學の起つた當初の狀態を記した考古學史に關する一編で、「考古學近時の趨勢」(濱田耕作、考古學雜誌)は現時到達した科學的の研究方法を擧げ、更に斯界の將來に及んだ處、示唆に富む「考古雜記」(同人、週刊朝日)と併せ讀むべきであらう。以上は主として本邦を中心とした概觀であるが、別に北鮮方面では「遼東の冢」(關野貞、建築雜誌)が樂浪土城出土の「朝鮮右尉の封泥」及び永光三年の銅鍾紹介し、特に後者の銘文の中にある孝文廟を研究したものであつて、「漢の孝文廟銅鐘銘識に就て」(稻葉岩吉、朝鮮史講座)の同じ銅器の銘文に關する考證と共に見る可きであり、支那

方面では上述の「遼東の冢」と「六朝の畫象石」(關野貞、考古學雜誌)とに柴田極人氏の藏する畫象石を以て女史箴圖と滿洲輯安縣の墓室の壁畫とを比較して年代を定めた興味のある論文をはじめ、易州の箱式古墳を報じた「支那の一古墳に就きて」(今西龍、同誌)昨年八月多數の古銅器が一群をして發見された事實の正確なる記載である「新鄭縣に於ける周代古器物の發見」(小鳥祐馬、支那學)あり、「天龍山石窟諸佛の製作年代」(小野玄妙、無礙光)は前年出た「天龍山石窟造像攷」の補訂文であつて、西峯諸窟を仙巖寺、東方の諸窟を天龍寺とする假定から出發して既述の一々の窟の年代觀を更に局限せんと試みてゐる。西人の研究の紹介である「アジヤ文化の起源」(後藤守一)またこゝに記すべきものゝ一と考へる。「京都帝國大學新着の埃及古物」(濱田耕作、本誌)は新たに英國埃及考古學會から同大學に送致した豐富な遺物の主なものに就いて解說を加へた埃及に關する論著で此外昨年はルクソルの諸王の谷でツタンカーメン王の墳墓が見出された爲、それに關する紹介として「埃及遺物の空前の大

發見」(村川堅固、史學雜誌)「エジプト王陵の發掘」(濱田耕作、官報)「發掘されたトウタンカーメン王の墳墓」(T.Ó生、中央美術)等が相次いで現はれ、また埃及各代の墳墓の發達を概觀した「埃及の王陵」(濱田耕作、科學知識)の發表があつた。最後に考古學と密接な關係のある諸學科中の業蹟に就いては、人類學の分野に信濃「諏訪郡壯丁の人類學的研究」(山內清男、平沼大三郎、信濃教育)と「滿洲城外小北山ニ於テ發見セラレタル遼代古墳ノ一頭蓋骨ニ就テ」(清野謙次、宮本博人、東洋醫學雜誌)とのオリジナルの二論著があり、風俗史では主として埴輪土偶に基いて論じた「日本原始時代の服飾」(高橋健自、中央史壇)と、遺物に立脚して我が中世の束帶の樣式を論じ起源に及んだ「束帶の起源」(同上)が注意に上り、また羽織の起源と其の襟に潜む疑問」(伊藤赳、考古學雜誌)の發表もあり土俗學の方面の基礎的調査には「朝鮮の民家」(今和次郎、建築雜誌)の勞作を擧げ得る。金石文の方面では「奈良春日神社の釣燈籠の銘文」(高田十郎、なら)を先づ起すべきであつて、これは一千を超ゆる多數

の釣燈を精査して一々の形狀と銘文とを年代順に記述した基本調査の記錄である。「百濟扶餘隆の墓誌に就て」(葛城末治、朝鮮)は前年支那洛陽で見出された此の重要な墓誌に就いての考說で、當代の書風に說き及んでゐる。右の外各地の資料報告は甚だ多いが、中で「奈良に現存する鐘」(高田十郎、なら)「出雲國宇賀庄雲樹寺の鑄銅經筒」(香取秀眞)「大和金石文の補遺」(高田十郎)「下野國に於ける金石文」(丸山瓦全)「能登國伊夜比呼神社所藏の棟札」(上田三平、以上考古學雜誌)「文殊知恩寺境內の石佛其他」(京都府報告)等が著しいものとすべきであらう。〔梅原〕

地理學界

概觀 机上にある歐米諸國の地理學の雜誌を一應見た上で昨年の地理學界に於ける問題だと思はれるものを取り出してみると別段前年に異つた點がなく、依然として自然地理學の方面では地殼論がやかましく論議されてゐる、其例は「地殼表面の構成」(ジョリー・ユエチュア)といふ論文である、氏はこの論文に於てジウス教授及其他の學者によつて推論された山脈構造を簡單に紹介し、海浸と云ふ事實を取つて陸が海となり、海が陸となると云ふ事を「地球革命」と呼び、かゝる革命は地球開闢以來四五回繰返されたものであるが、其の革命の主因は、アイリスタシーの理論から見ると、玄武岩の上昇と云ふ事が重大で、玄武岩にはラヂウム放射の物質が多い故に凡二千五百萬年にして其放射熱のために堅い岩石がとけて陸が低くなり海浸が生ずる、かゝるラジウム放射熱を伴ふ玄武岩の上昇によつて地殼に昇降があり、山脈はこれに伴つて生ずると述べたものであるが、この論の如きは最も奇拔な地殼構造論の一である。其外に「地殼と其アイリスタシー」(ボウィー、ジエオグラヒカルレビユウ)なる論文がある氏の說明によれば地殼の均衡面は六十哩內外の所にあるといひ、一の地塊が他の地塊との間に均衡を保つ距離は百哩以內であらうとのべ、こゝにAなる表面浸能をうくる地塊があれば、これに接近してBなる表面堆積をうくる地塊がある、均衡が成立してゐるから、Aの表面が浸蝕されて絕ずAよりBに物質の移動があつても其補償として、地下六十哩の深さに於てはBより絕え

ずAへの物質移動がある、この際Bは下降の地でAは上昇の地であるがAの表面が全く削られた時にこの關係は一時中止し、偶然の展開によつて、今度はBが上昇の域に變るものである、若しかゝる地殼の變化をうくる區域は地球上一定のアクチーブ、レギオンに限られるものだと論じてゐる。これは前者の如く奇拔でないが、兩者何れも桑滄の變、卽地殼の變動を取り扱つたに至つては同一である。次ぎに政治、人文、地理の方面で「歐洲に於ける政治的變移地帶」（アンステッド・ジエオグラフイカルマガジン）の如きは注目すべき論文である、氏は新興のフインランド、エストニア、ラトヴイア、リトワニア、ポーランド、チエッコスロヴアキア、ダンチヒ、フイウメ、バルガン諸國等の一帶を、東の「ろしや」平原、西の獨佛平原より區別して、地理學的にも、人文學的にも複雜せる地方であるとのべ、歐洲の自治制度と東方亞細亞の專制國家との中間地帶であり、人種の複雜せる、風俗人情の雜然たる、而して將來も猶歐洲の不安を宿すことを明快に論述したものである、かく人文地理に關して歷

的史の見方を加へるといふ事は實に最近歐洲地理學界の傾向であつて、「カリフオルニアに於ける西班人の前進と其地理學的事情」（ロードウエルジョンス、同誌）の如きは其最も著しき好例である、卽こゝの論文は西人が何故に小アンチル列島の植民をすてゝ大アンチル列島に移り更に轉じて、メキシコ、ペルーに植民したか、何故にメキシコは容易に征服されたかと云ふ地理的因子から進んでカリフオルニアへの植民に伴ふ地理學的困難の事情をのべたものであるが「水路としてのダニウブ」（オルムスビー、同誌）の如き又は「スコツトランドの運河」（キヤデル同誌）の如き論文はいづれも其歷史的研究が主要なる位置を占めて居る。轉じて探檢の方面を見ると「北絲州に於ける丁抹人の探檢報告」（コツホ、ジエオグラヒカル、ジャーナル）があり「佛領西アフリカ、エイル地方の探檢」（ロッド、同誌）、南極地方では「グラハムランドの報告」（レスタリ、同誌）などの州に支那に關する英人の活動を見逃してはならぬ卽「重慶より海防へ」（ツールス、同誌）の旅行記をはじめ、「北西雲南に於ける探檢報告」（グレ

ゴリー、同誌）はサハウイン川メコン川、金沙江三流の近接地方の位置及高度を示し「アルヌの谷」（モーリス、同誌）は、エヴエレスト山に發する幽谷の狀を報告したもので共に注目すべき記事である。轉じて、我國の地理學界を見る、先づ著書として擧ぐべきものに「地形學」（辻村太郎）がある、昨年最初の出版物で地形地貌に關する詳論である、風化作用がいかに地表を鏤刻するかを學ぶによい、もしこの書にして我國の各特殊の地形に就て更らに豐富に立證されたならば、初學者の喜ぶ所蓋し大なるものがあつたであらう、つぎに「支那の鐵道」（鐵道大臣官房外國鐵道調査課）がある、緒論、既成鐵道、未成鐵道の三篇六十一章及統計から成立せる尨大な報告書である。この種のものに「北滿洲と東支鐵道上卷」（南滿鐵道油査課）がある、ミハイロフ氏の編纂せる露文を飜譯したもので、下卷は未刊であるが凡六百頁の大冊子で北滿洲の生産業を知るに最も良い參考書である。滿鐵庶務課はこの外に多數の地理書を飜刻中であるこの事で、「滿蒙西比利亞地圖二百萬分一」（滿蒙文化協會）の如き、大正六年以來の調査の結果であつて斯學に裨益すること大なるものである、滿鐵のかゝる調査に併せて臺灣總督府官房調査課は年々尨大な統計、報告書を出す、外本年は「蘭領東印度諸島に關する人種學的研究」の飜譯出版をなし同人種分布圖を配布した、又朝鮮では「朝鮮部落調査報告」（朝鮮總督府）と題する囑託小田內通敏君の努力に成つたものが出た、かやうに植民地の官衙に於て競ふて調査をやり、地理に關する出版の續出することは誠に結構であるが、內地に於ても府縣廳をはじめ各省の有益なる調査が出ないのではないが、其の周知が完全でない事を恨むものである。「自由港の考察」（內務省土木局編纂）の如き其一例で自由港に關する權威ある六篇の論文の飜譯集である。これは本年度に生れた內務省內の港灣協會から出版したものである。同協會は朝野の有力者を集めた堂々たる者で海國日本の興隆を企圖し「港灣」と稱する月刊雜誌を出し、主として交通、港灣方面の論說をのせてゐる。「日本の港灣」第一卷を出版したのも實にこの會最初の事業であつた、かゝる協會の發達は單に地理の方面

からでなく、國家的にも希望する所である。次ぎに各雜誌に顯はれた、地理に關する論說を、筆者の見た限りに於てのぶれば、まづ自然地理學の方面に於ては「渦卷形地形に就て」(藤原咲平、地學雜誌)を第一に上げねばならぬ、氣象學者たる同氏は空氣又は水に渦流運動があるが、其運動の物理學的研究から出立して、地殼にも同樣の運動がありそれが地形の上に現はれてゐると云ふ事を論じ、岩石又は地殼は從來彈性體として取扱はれたものだが、實際はプラスチック、(可塑性)なものであるからたとへ固體であつても高壓の下に於ては流動するものだ從つて二つの相反した方向に地殼が動くことがあれば必ず渦卷が出來る、アルプス、ヒマラヤをはじめ東印度諸島の地形にその渦卷が見える、「ろしや」の地質圖にも同樣の運動の結果が現はれてゐる、我國の海岸の地形にも同樣の運動の結果だと見られるべき所があると論じたもので蓋し地殼構造論上注意すべき論文であると信ずる松本糸魚川幷に糸魚川輪島間地盤垂直變動」(大森房吉、同誌)は、我尊重すべき地震學の碩學泰斗たる大森博士の地

學雜誌上に於ける絶筆である、地震と云はず我地理學の發達に就ても博士に期待すべき多くの問題を殘して幽明界を隔たとに甚深の哀悼を表する、扨この論文は大正七年十月信州大町地震の地盤垂直運動の調査を陸地測量部に依囑して得たる成果を述べた者で、糸魚川町で百十八粍の低下、大町附近で二百八十粍の上昇といふ事實が明にせられた、序に三浦郡三崎の潮位は明治三十一年以來上昇し平均一ヶ年六・四粍つゝ高さを增せるを以て地盤低下の證なりと述べてある。實に大地は動くのである動くといふ事の緩慢な場合、急激な場合、いろ〳〵の變化に應じた、地皮の皺曲、渦卷、斷層、陷落、といふ問題は今世界のあらゆる地理學者の研究の對象である。ここに最近の大地震を經驗した我國學者の當面の研究問題であらねばならぬ、(地震及地震に關した論說は後段別に一纏に記述する)夫から「ウエーゲネル氏の大陸移動說」(七軒學人、同誌)「大陸の漂流」(北田宏藏、歷史と地理)は何れも昨今學界に喧傳せらるゝウエゲネルの移動說を紹介せるもので、同時にこの奇拔な新說に對する反對說も若干論

述してあるが、上來述べた通り、大地が動くのは動かすべからざる事實であるから、それが如何樣に動いたか、動かんとするかといふ論は、今後猶多くの新說を招來するであらう。「日本高山形」(辻村太郎、地學雜誌)は純地形學の立場から我國の近き過古に氷河の存在した事を力說し、雪蝕と氷河蝕との區別を述べ、日本に存する氷蝕に因りて生じた尖峰を木曾駒ケ嶽、立山、穗高等の最高峰とし、高瀨川及梓川上流の地形は氷蝕によつて出來た者であると說き、「浸蝕輪廻とアルプス山脈山頂の高度」(GS生、同誌)は現在のアルプスになる迄に、三回の輪廻があつたといふペンク敎授の意見に對するデヴィス敎授の評論を抄譯した者である。「淀川の研究」(伏見義夫、歷史と地理)は淀川流路及流域の地學的變遷を論じた者「文化と地質學」(本間不二男、科學智識)は地殼構成の主要成分硅酸鹽類の利用に關し其將來を述べた者である。「芝罘附近の地形及地質」(田中館秀三、地學雜誌)は山東の地質地形から鑛產に乏しきを記し、他の生產業工業の狀況に及び「信州の雨氷」(池內精一郎、同誌)は大正十一年一月の雨氷について其結氷狀態を詳論してある。つぎに經濟地理の方面を見る、「我國將來の貿易に就て」(下田禮佐、歷史と地理)は天惠の少い我國現在の立場から、いかに輸出を促進すべきかといふ點を力說し、「維新以後に於け外國貿易に就て」(石橋五郎、史林)は維新當初の貿易事情を英國領事館報告書其他によつて闡明したものである。「獨逸視察談」(俵國一、地學雜誌)は旅行の目的が製鐵事業發達の模樣を視察するにあつて、二十年前日本への鐵の輸入が十萬噸餘であつたのに、今日は其二倍以上である、然るに其間に於ける世界の鐵の產額は一倍半にしかなつてゐないから、世界の市場に對し日本がいかに大切な購買力を持つてゐるかと云ふ事をとき又獨逸復興の勢を記し「支那を視察して」(渡邊豐日子、朝鮮)は滿州水田の利及滿州に於ける鮮人、山東に於ける、落花生、烟草の產出、製油、製糸工業の進步を記し、「南阿旅行談」(鈴木茂治、地學雜誌)は南阿の產業、主として石炭、金剛石及黃金の盛んな稼行と相互の關係をのべ、「常夏の國より」(守屋榮夫、朝鮮)は香港から印度へかけての旅行記で、

邦人と南洋との關係を論じ、「オコック海方面の情況」（枝原百合一、地學雜誌）は千早艦長として、てオコック、アヤン、シャンタル島へ巡航した時の見聞をのべ、漁業の外に砂金、鐵、石炭等相當の見込あることを記し、漁業以外の鑛產には、英米人の方が、日本人よりも敏捷に着手してゐると警告し、「朝鮮機業の現在及將來」（都澤正章、朝鮮）は年額貳千萬圓を突破する織物業に就ての將來を論じ、「燐酸礬土礦石の利用法」（米山兆二、地學雜誌）は肥料自給の必要から、北大東島の燐酸礬土礦の研究をはじめ、これを利用しうる方法を說明し、併せて北大東島は隣接のラサ島と成因に差があると論じ、因に本島の礦量は一千萬噸の見込であるといひ、「秋田縣石澤村の白土」（千谷好之助、同誌）は秋田縣由利郡石澤村大字鎔內產の白土について說明を加へ「寶石の產狀及分布」（會我巷祐、同誌）は世界に於ける寶石平時の年額八千萬弗の中、金剛石は其九四・三パーセントを占め其他靑玉紅玉翡翠等の地理的分布を記し「メソポタミア油田」（小林儀一郎、同誌）はメソポタミアの油田を述べ「大正十年本邦の鑛產」（AB生、同誌）、は前年に比し石油の少しく增加せる外何れも減少し、價格總額參億參千萬圓を超ゆと記し、「我國近古の鑛產と貨幣」（藤田元春、歷史と地理）は我國鑛產の消長に伴つて貨幣の改鑄改惡があつた事を明にし、「米の需給はどうなるか」（安藤廣太郎、科學智識）は我國人口增加に對する食糧問題としての將來を論じてゐるが米の一反步の產額を增加せしむればよく而して其增加は可能であるとの樂觀論である。次に人文地理學の方面を見る。「世界改造の地理學的考察」（下田禮佐、歷史と地理）は前年からの引つゞきで本年は第六節　ろしやの現狀をのべ、「米國に於ける排日熱の眞相」（安達金之助、地學雜誌）は一億一千萬の米國人の中に、凡一萬乃至二萬人の排日家が居るといふ事をのべ、米國民は廣告的である故に日本の實情を了解せしむるが、排日緩和の良策であると說き、「南米に遊びて」（山崎直方、同誌）はブラジル及アルゼンチンに於ける博士の視察談として、サンパウロ州、サンタ、カタリナ州等をはじめアルゼンチンへの移民を奬勵してゐる。「海外在留の日本人」（AB生、同誌）

は大正十一年六月調査によれば、本邦人の在外數は十九萬二千百七十七人で十年六月よりも約二萬五千人の增加であるが、其の移民先きは、滿洲が第一で米國布哇之につぎ何れも十萬人以上に達すといつてゐる。「米國に於ける都市計劃概要」(ビアード、朝鮮)は米國費府の都市發達を論じて我國の都市計劃の參考に供したるものである「江戸地勢考」(阿部愿、歷史と地理)は非常に長く數卷に亙つた論文であるが主として江戸の發達の歷史的考證である、「本邦最近の結婚年齡に就て」(林惠海、東亞の光)は統計表によつて明治三十二年を標準とし大正八年に至る各年齡階段の配分率を見ると男女共に晚婚の傾向にありと說き、之を歐洲諸國に比すればまだ〳〵晚婚とは云へず、同時に晚婚の爲に生產率減退といふ現象がないと論じ、「臺灣民族の文化」(桑田芳藏、同誌)は氏がガオガン蕃マカザヤザヤ社を調査した風俗の報告であり、「支那古代の地割にいつて」(藤田元春、史林)は周秦漢の尺度の基本を爲す步の長さは五千年來變化なく、尺も其の基礎搖がされば一井田は我が三町十間四方則ち三萬六千百坪にして井田法が必しも儒學の空想ならざりし事をのべ「奈良市」(西田與四郎、地理教材研究)は奈良市の發達及職能について地理的に研究せる者、「松都の民」(京畿道廳、朝鮮)は高麗の舊都たる松都がいかにして現今の實業都市に變じたかと云ふ歷史的人文現象をのべた者でこれら二三の論文は人文地理學の一方面として近來都市の研究漸く盛ならんとするの傾向を示めす者である。此他「香川縣の自然と人生」(伏見義夫、歷史と地理)「硫黃列島」(山鹿益三、科學智識)の二論文の如きは島國と人文との關係を詳論し「十六島灣沿岸の土地と住民」(小牧實繁、歷史と地理)は半島の環境に適應した人文現象をのべた者で「山岳を中心としての民間信仰」(加藤咄堂、東亞の光)は山岳に對する信仰の變遷と諸種の雜行を論じ、最後に富士山中心の宗教が自然に發達した徑路を述べた者である、以上列記せる數箇の論文は何れも自然と人生との關係を地理的に說明せるもので斯學のこの方面の傾向を語るものである。次に交通地理に關する方面から特記すべきものを列擧する、蓋し「港灣」の新に刊行さ

れたといふ事實がいかにこの方面の求智刺激が多いかを語るのであるが、古い時代から云へば「常世國に就て」(黑板勝美、歴史と地理)は我國上代の日韓交通を論じ「日本と吳越との交通」(西岡虎之助、同誌)は朱雀天皇承平以後我國と南支那との交通事情を記し、「德川初期に於ける國内海運の發達」(古田良一、史林)は東廻及西廻航路の發達の由來をのべ「大阪港と其水運」(山極二郎、地理教材研究)は大阪港に關する交通上の人文的説明である、「朝鮮に於ける鐵道の發達」(鐵道部、朝鮮)「朝鮮交通發達號」(同誌)と併せ讀むと朝鮮に發達した國有鐵道の沿革と現勢が明になる、「日本南アルプスの初踏査」(横山又次郎、科學智識)は明治十五年の夏、博士が地質調査所長ナウマン氏の命令で赤石山脈調査踏破の思ひ出であり、「熱海線と丹那大隧道」(脇水鐵五郎、同誌)は熱海線の由來をのべて其利益を記し延長二萬五千六百十四呎、日本第一の大隧道を地質上より見た工作現狀を詳述し「船舶の電氣推進」(鳥田敬之、同誌)はタービン及ヂーゼル電氣推進器の説明であつて、其がいかに交通上重要となつ

たかといふ事を語り、「軍用航空機に就て」(山階宮武彦王、同誌)は航空船及飛行機の御説明に兼て世界各國に於ける航空機界の狀況のいとも明瞭な説明である、最後に記したいのは「空中寫眞から地圖になるまで」(坂野久重郎、同誌)で之は用ふる器械の説明と、それによつて寫眞地圖の作らるゝ手續きとが説いてある、最近、我陸地測量部に機械の備付があつて其の製圖研究の途上に立つたのであるが、切に其健全なる發育を望んで已まない、以上二三の論文は蓋し最近の交通地理上見逃すべからざるものであらう扨地理學に關した一般の概況の報告は、まづこの位に擱筆し、これより進んで昨年の一大地變であつた東京其他關東地方の地震に關する一節を記して、思ひ出の多い昨年の地學界を送りたい。震災第一に地學協會で災厄にかゝり會館及所藏の書籍全部を烏有にした中にも年來大陸調査の際に蒐集した資料の豐富なものを失つたことを痛惜する。地學雜誌の如きは九、十、十一、の三月分が、憐れにも三十六頁内外の薄い雜誌となつて出たが、農商務省地質調査所の罹災は地學協會にも劣ら

る殘念さである、蓋し九月一日の大震に際し、本所發烟室から發火したのを辛うして消止めたにも不拘其後木挽町が猛火につゝまるゝや、僅に一階右方の鑛物標本室一室を殘して創立以來同四十五年の調査所が一朝烏有に歸し、之が爲めに地形圖及地質、原圖、標本、刊行の書籍、地圖、世界各國の地質調査所からの報告、幷に寄贈地圖をすべて失つたのである、以上のものはすべて四十五年間の蓄積であつて、猶以上の長年月に亙つた産物であるから、之を復舊するだに容易でない。同樣に海軍省の水路部が罹災して海圖の原圖以下機械に至るまですべてを失つたことを記したい。かくて我々は今日迄の地質圖又は海圖を再び一揃へするといふ事が二三年の間に到底出來ないと云ふ事を思ひ合せて、轉た震災の地學に及ぼせる影響の大なるに驚くものである。次に震災に關する諸學者の活動を見ると、地質調査所の多數の技師が自家の災厄を顧ずして房總地方、三浦半島、箱根地方、厚木地方に出張したこと、東北帝國大學地質學古生物學教室から五班の調査隊が出たこと、我京都帝國大學地質學教室から前後數班の實地視察隊が出たことの外に、中央氣象臺、神戸海洋氣象臺等の技師が逸早く震源に關する說明を出して新聞紙上を賑はした事などが目立つたのであつたが十二月になると落付きも出來て、京都帝國大學地球物理學教室で志田博士が第一回調査報告會を爲す迄になつた勿論、今度の地震に關しては、詳細な研究報告が今後出ることで本年度には重要な刊行物の出ることゝ信ずるが差當つて昨年中に發表せられた、地震に關する論說報告數を一應網羅して置く。「第一回震災調査報告」（井上禮之助、地學雜誌）、は家屋の倒潰龜裂崩壞。井水及溫泉海嘯及音響。土地の降起。の六項に就て被害地全般の狀況を記し「關東地震調査概報」（小川琢治、京都帝國大學地質學教室）は關東平野の西部山地震害の概況で、小田原より西北に富士火山帶に沿ひて、遠く信濃川流域に亙る構造線の存在と其震動を說き、「大地震調査日記」（今村明恒、科學智識）は震災後最も早く且つ多くの人の見た記事であるが、科學者として當面せる態度が明に表はれてゐて、一讀涙なきを得ない、「今後の地震の爲

め」（同人、地學雜誌）は今回の大地震に關し、社會一般が不用意の爲めに災害を大きくした事を認め、地震學者としての不注意は、第一今回の如き大地震を記錄する地震計が備はつていなかつた事、第二、東京の重要建築物が耐火又は耐震構造であつたとしても耐震火建築でなかつた事、第三、今度の地震に前徵を認め得なかつた事をのべ、特に恐るべき災後の大火に對する宣傳の不足を悔ひてある、「畏るべき天の威力」（伊東忠太、科學智識）「地震と建築」（佐野利器、同誌）は何れもこの震火災に關する事前の注意を叫び「大火災と氣象」（藤原咲平、同誌）は火災の爲に起つた烈風旋風の說明であり「地質學上から見た大地震」（横山又次郎、同誌）は地震に關する一般學說の解釋に止まり、「地震は如何なる場所に發生するか」（脇水鐵五郎、同誌）は日本の地帶構造を說て關東に及び、今回の地震の原因を論じ、「相模灘大地震の概觀」（須田皖次、同誌）は氏が神戸海洋氣象臺に居て各地測候所の報告により、初動の方向から震央を相摸灣と定め所員と共に實地調査を行つた結果、餘震に二つの系統あるを知り、今度の大地震に馬入酒匂系統と房總系統の二ありと云ひ、其原因として、當日北陸地方を掠めて金華山沖に出た氣壓傾度の急な複低氣壓によつて誘發されたものと斷定したもので、若干我田引水の論である。この外「日本と地震學」（藤田元春、歷史と地理）は日本に於ける過古の地震研究の發達史を概說し、「東京山の手方面の震災」（佐藤止戈、地學雜誌）「千葉市附近の震災」（清野信雄、同誌）「品川臺場の震災」（渡邊久吉、同誌）「震災後の熱海間歇溫泉」（佐藤傳藏、同誌）等何れも局部的の報告である。東京帝國大學教授學生數十名が調査作成した「帝都大震火災系統地圖」のごときは忽卒の際に於ける產物としては出色であり、「民族學上より見たる今回震災の跡」（鳥居龍藏、東亞の光）は東京を、高臺地の江戸と低地の淺草とに二分して考へたものである。最後に「島原半島の地震」（下田禮佐、歷史と地理）が昨年二月五日の島原地震に關する論述であつたことを附記したい。猶此外に多くの地震に關する論說があつたか今は地理に關する限りに留めておく。〔藤田〕